

〈生活〉と〈歴史〉を結ぶもの

——山川菊栄論——

林 葉 子

目 次

序 章 〈第二の山川均〉を超えて

第一章 若き菊栄、そして山川均

第一節 ある〈夫婦〉の肖像

第二節 模索と葛藤 一九二〇年代

① 菊栄の新婦人協会批判と均の普選運動否定論

② 均の「無産階級運動の方向転換」と菊栄

③ 関東大震災時の朝鮮人虐殺事件をめぐる

④ 「婦人部論争」前後

第二章 社会史へ——新たな知のかたちを求めて

終 章 ひとつの帰結・『武家の女性』と『わが住む村』

〈生活〉と〈歴史〉を結ぶもの

同志社法学

五〇巻四号

一四三（二三三五）

序 章 〈第二の山川均〉を越えて

「『第二の性』はサルトルの実存主義が哲学的な背景となつていますが、それでも完全な創作です。この本は女性に関する私の見解を反映しています」

——シモーヌ・ド・ボーヴォワール⁽¹⁾

山川菊栄（一八九〇—一九八〇）の思想家としての不幸は、彼女の評価が良くも悪くも常に夫・山川均（一八八〇—一九五八）を意識した形でのみ行われ、独立の思想家としては扱われなかったという点にある。菊栄は均の別^{ヴァリアント}形でしかなかった。それはあたかも、「男性」^{マン}が、女性をも含む総称としての「人間」^{マン}であり続けたことの如くである。菊栄の思想が論じられる際には、大抵そこに均の影響が自明なものとして示唆されるが、その思想的影響の内容が、それ自体を主題として検討されたことはない。

菊栄と均の関係は、しばしば〈均の社会主義の理論を、菊栄が女性問題へ応用する〉⁽²⁾というイメージで捉えられてきた。この一見もっともらしい、しかし実際きわめて不自然なイメージは、菊栄に対する評価に決定的な影響を与えたといつていい。

「社会主義者・菊栄」にその評価の焦点が絞られる場合、均を高く評価する者にとって菊栄とは、均を評価する限りにおいて敬意を示すべき対象と映つたであろうし、逆に均の理論に批判的な者にとっては、均を批判するときと同様の論法で大局において批判されるべき対象と捉えられたであろう。〈均の理論を菊栄が応用〉というイメージで二

人の関係を捉える限り、応用したこと自体は菊栄の独創として一応の評価を受けたとしても、それは、もともとの均の理論が否定されれば、もろともに崩れてしまう程度の評価だった。

「女性解放論者・菊栄」に着目する場合、特に日本の現代フェミニズムとの関連で論じられる時には、社会主義内部の内容的差異には関心が払われないことが多いため、菊栄の「社会主義」は、注意深く検討されるより先に、単に「階級支配が廃絶されれば、女性は自動的に解放されるはず」⁽³⁾だという考え方として、要約されてしまう。しかし、「自動的に解放される」ことなどあり得ないということ⁽⁴⁾を誰よりも骨身にしみて知っていたのは、ほかならぬ菊栄本人なのである。菊栄は、社会主義者たちの男女関係が「ブルジョア階級」のそれ以上に醜悪であることを知っていた。われわれは、一般的なイメージとしての「社会主義女性解放論」を何度くりかえし語って見たところで、決して菊栄の本質に近づくことはできないのだ。周囲の社会主義者たちの女性への無理解に苦しみながらも、外部からの批判という形をとらずに自ら「社会主義者」に留まり続けることによってのみ菊栄が為し得た、いわば換骨奪胎の過程を分析することこそが、彼女を理解する上で重要なことなのである。したがって、一般的なイメージとしての社会主義にとらわれずに「女性解放論者・菊栄」の本質を見直そうとするのであれば、逆説的なことだが、それは均をも含めた他の社会主義者の主張との微妙な差異を追うことによってしか為し得ないのだ。

いずれにしても、〈均の理論を菊栄が応用〉というイメージそのものの肝心の妥当性は、これまで検討されてこなかったのである。そして、菊栄の思想を単に〈均の理論の女性版〉と考えた結果として、菊栄の思想の持つ重要な可能性が軽視されてきた。それは、均にはない歴史家としての顔である。

菊栄は、しばしば「理論家」と評されてきた。⁽⁵⁾確かに、同時代の他の著名な女性論者たち、例えば平塚らいてう、伊藤野枝、市川房枝といった人々と比較すれば、菊栄は「理論家」的な印象を与えるのであろう。夫である均の「理論家」としての側面が、菊栄の印象と二重写しになっているという要因もあるのだらう。しかし、そのような印象に寄りかかり、菊栄の思想の本質を「理論」にのみ求めるのは、早計に過ぎるのではないか。菊栄を「理論家」というイメージの中に閉じこめてしまったからこそ、菊栄の歴史家としての仕事が、「社会主義者」の晩年の余技という程度にしか扱われないのではないか。「理論家・均」のイメージから離れて菊栄の思想形成過程をたどるならば、彼女が最終的に望みを託したのは、理論としての社会主義よりも、むしろ菊栄が「生活」と呼ぶところのリアリズム、その体現としての「社会史」だったのではないかと思えてくるのである。

菊栄は晩年、インタビューに答えてこう述べている。

私には特に独創的な婦人論というものはありません。ごらんの通り終始平凡な常識的なものばかりです。支持ないし同感して下さる方が多いとすれば、その平凡で常識的なるが故にこそと思われれます。私の書いたものをよんで下さる方は、その平凡で常識的なのが婦人解放論の真理であることを知ってほしいと思います。やたらとマルクス主義とむすびつけて考えないでほしいと思います。⁽⁶⁾(引用部における括弧内の補足および傍点は、以下、断り書きがない限り林)

「平凡」であることを強調する菊栄の姿に、自らの自伝を『ある凡人の記録』と名付けた均のイメージを重ねることはたやすい。そして確かに、均のみならず菊栄も、共に「非凡なる凡人⁽⁷⁾」と評価されてしかるべき人物であったし、「大衆の中へ」という理想は二人に共通するものだったといえる。しかし、めざす目標は同じでも、二人がそれぞれにその共通の目標へ到達するための道のりを描くとき、そこには本質的な相違が見いだせるのである。均が最後まで理論構築に希望を託したかに見えるのに対して、菊栄はある時期を境にして理論から離れ、自らの思想を表現するための、よりふさわしい知のあり方を模索し始めた。

その知のかたちを、ここで「社会史」と見なすにあたっては、⁽⁸⁾「社会史とは何か」という点に論及する必要がある。とはいえ、「社会史」の概念をめぐっては、日本においても既に一九二〇年代から様々に論じ続けられており、喜田貞吉・本庄栄治郎・瀧川政次郎による「日本社会史」論争においても中心議題となった大論題であるから、この「社会史とは何か」という問いに「山川菊栄論」としての本稿の中で私自身の最終的な結論を出すことは、もとより不可能である。よって、社会史の方法論そのものを直接的に論ずることは今後の課題とし、本稿においては、「社会史」が日本において論じられてきた経緯を簡単に記すに留めたい。

近年、「社会史」はフランスのアナール学派との関連で論じられることが多い。しかし「社会史」の語そのものは、佐野学『日本社会史序説』（一九二三年発刊）で既に用いられており、喜田貞吉主筆の雑誌『社会史研究』の刊行が一九二三年、本庄栄治郎の『日本社会史』が一九二四年発刊、瀧川政次郎の『日本社会史』の発刊が一九二九年であるから、日本において「社会史」が論じられるようになったのは、一九二九年創刊のアナール学派の機関誌『社会経

『済史年報』(Annales d'histoire économique et sociale) が日本に紹介されるより以前のことである。

「日本社会史」論争の中心議題は、「日本社会史とは何か」であり、殊に「社会史」か「社会階級史」か、という点をめぐって論じられたが、概して、一九二〇年代の日本における「社会史」は、社会問題の発生を背景として、「社会」とは何かを人々が強烈に意識した結果生まれた「問題史」としての側面が強いといえよう。

狭義の「社会史」をめぐっては、この論争の当時から現在に到るまで様々に意見の相違が見られるものの、「社会史」を標榜する作品はどれも、政治史・英雄史・事件史中心の伝統的な史学の潮流に何らかの形で対抗するものとして形成されたという点において共通している。「社会史」は、未だ確固たる輪郭の定まらぬ開かれた概念でありながらも、今日に至るまで、なにものかを喚起し続けてきた。その言葉の力を借りながら、本稿は、菊栄の作品を「社会史」と位置づけることにより、それぞれ別個のものとして無関連に扱われてきた菊栄の「社会主義女性解放論」と歴史の著作との、両者の思想的なつながりを示し、これまで看過されてきた彼女の思想の本質を明らかにしようとする試みである。

菊栄の「社会史」的著作としての『わが住む村』や『武家の女性』が、柳田國男の薦めによって出版されたのは、菊栄がすでに五十代も半ばの一九四三年のことであるが、これらの作品が生み出された直接の要因については第二章、そして作品そのものについては終章において詳述したい。彼女の思想の到達点として「社会史」を考えるならば、彼女の歴史的著作は、その思想を探るための最も重要な資料となりうるが、菊栄が人生の半ばを過ぎてようやく歴史へと向かうまでのその過程は、それ自体、前座として検討の対象から外すには、あまりに多くの示唆と教訓に富んでお

り、また、その過程を論ずること無しには、菊栄の著作が、いかなる意味において「社会史」的であるかを説明することは困難である。よって、本稿第一章においては、〈理論家・菊栄〉というイメージに基づいてなされた彼女の主張をめぐる既存の解釈を、山川均との比較によって再検討し、それを新たに、「社会史」へと向かう思想形成過程として読み替えることから始めたいと思う。

第一章 若き菊栄、そして山川均

第一節 ある〈夫婦〉の肖像

菊栄と均を比較するとき、二人の主張には似通った点が多くみられるのにもかかわらず、その人物像には対照性が見てとれる。

菊栄は幼い頃から日本の古典は一通り読みこなし、日本の現代文学をはじめ、ロシア文学等にも興味を持つ文学少女であって、彼女に「人間の社会」⁽⁹⁾について教えた「最初の手引」は樋口一葉の小説であった。⁽¹⁰⁾ 菊栄は「リアリスト」⁽¹¹⁾一葉を高く評価する。この一葉評価に始まって、菊栄が生涯一貫して自らの評価基準としていたものはリアリティであったといえよう。彼女が「潔癖なリアリスト」⁽¹²⁾（橋川文三）たる柳田國男を師としたのも、決して偶然ではない。

均は、自然科学に憧れ、物理学者になりたいと考える理系少年であった。⁽¹³⁾ 均の関心は、同志社時代に自然科学から

人間へと移り変わって行くが、⁽¹⁴⁾そのような変化の内に一貫しているのは、彼のロジック、重視の姿勢である。

均は、理論的関心から社会主義へ入る。同志社の学生時代、日本で最も早くから講壇で社会主義を講義した教師ラーネッド、『国民之友』でロシアやドイツにおける社会主義の動きを紹介していた先輩・徳富蘇峰に刺激され、また学制改革によって導入された「教育勅語」の授業が反面教師となって、均は「熱心な共和主義の主張者」へと変貌してゆく。その自伝に明らかかなように、均の社会主義は同志社の学校教育のなかで学習と議論とを通じて育まれたものであった。⁽¹⁵⁾知識から社会主義に入ったのである。

一方、菊栄の社会主義の原点は、女工の置かれた悲惨な待遇の実体を知ったことの衝撃と、そのような女工たちに「労働神聖」と説く救世軍への反発である。⁽¹⁶⁾菊栄は女子英学塾に入学した年、神田の救世軍本部のボランティア活動に参加する。ある冬の朝、押上の大工場で菊栄が見た光景は、後に何度も繰り返し彼女の回想にあらわれてくることからわかるように、彼女の胸に焼き付いて、生涯離れなかった。菊栄はそのときの衝撃をこう表現する。

そこに集まった(女工の)若い、活気のない、無知な顔、救世軍の人々のわざとらしい誇張した身振りや口調に感心して、半ば口を開けたままドンヨリ演壇を見詰めた、空虚な暗い鈍いその表情! ああこれが人間だ、これが私たちの姉妹だ、そう思ったとき、私の胸はかきむしられるように感じた。彼らの魂、彼らの青春は早くすでに何ものかに吸い尽されて、ここにあるのはただ彼らの残骸なのではないか、生きながら屍とならんとしつつある彼らではあるまいか。私は胸を圧しつけられるように感じた。しかし私の沈思は長く続くことを許されなかった。

それはちょうどこのとき、私が一方に女工らのみじめな顔や姿を見入りつつ、耳にとめていた救世軍の人の説法はその極点に達し、それと同時にその説くところの虚偽に対する私の憤りが猛然と炎え立ったからであった。彼といま一人の救世軍の婦人は、女工に歌を唄って聞かせ、一節ごとにそれを繰返して女工に暗んじさせた。その歌というのは、イエス・キリストは大工の子である、彼も労働者で、よく働いて、不平をいわなかった。働く者には神の恵みがある、われわれもキリストにならって不平なきよき労働者となり、神の恵みにあずかろう、労働は神聖である、といったようなものであった。(中略) 話半ばに私は幾度席を立上ろうとしたことだろうか？唇をかみしめつつ、そしてそんな話にあるいは笑わされ、あるいは感心させられながら聞き入っている女工らの顔を見た私の心は、実にいいようなない悲痛に燃え立ったのであった。私は他の来観者と一所にいたプラットフォームからとび下りて女工らの中に行きたかった。私は彼らに詫びたかった、私は彼らの前に平伏したかった、——何故なら私は、私たちは彼らを汚している、彼らを欺いている、彼らを踏み躪っているという良心の苛藉に堪えなかったから——。そして私は彼らに詫びて、私が彼らの友達であることを告げたかった。⁽¹⁷⁾

救世軍と菊栄のどちらがより正しいかというような事が問題なのではない。菊栄のこの回想を読んで、世間知らずの若さゆえの、極端な潔癖さや青臭さを指摘することは、むしろ容易なのだ。菊栄のここでの表現に彼女の生涯続く「宗教嫌い」⁽¹⁸⁾の萌芽を見て取り、キリスト教から深く思想的影響を受けた均と対比させることは、二人の人物像を比較するうえで興味深い論点となりうるだろうと思う。しかし、菊栄のこの記述に関して本稿でより重視したいことは、

「理論的」「科学的」と評されることの多い菊栄その人の出発点が、実は「理論」とはほど遠いところにあったという点である。菊栄の救世軍に対する憤りは、何らかの演繹的なロジックに裏打ちされた形で出てくるのではなく、ただ女工のリァリテイにそぐわない救世軍の固定化したロジックに対する違和感の表明として、ひたすらにぶつけられるのみである。この自らの体験を原点として出てくる菊栄の「社会主義」は、その出発点において、何らかの体系的な理論というよりは、現状批判のための「よりリァリテイを持つ何か」である。

菊栄は日本の女の現状をよりリアルに説明しうる言葉を探し求め、その過程で社会主義と出会ったのである。⁽²⁰⁾ そのような菊栄にとっては、学ぶべき「社会主義」は、自らの場と切り離しては意味をなさず、まず第一に日本の社会主義でなければならなかったのであろう。外国留学の話も、菊栄にはあまり魅力あるものだと思われず、コロンビア大学への奨学金の推薦も断ってしまった。⁽²¹⁾ 他方で、「日本のマルクス主義」体系理論の創始者と評される均⁽²²⁾その人が、自らアメリカ留学の機会を求め、滞米中の幸徳秋水に連絡をとったものの、反対されて思いとどまった、というエピソードは、⁽²³⁾ 菊栄と均の思考方法の違いを反映しているとも思われ、興味深い点である。

菊栄が残した膨大な数の評論のうち、教育問題に関するものは少なくないが、菊栄は単に教育を論ずるだけでなく、実際に多くの女性問題研究者を育てた教育者であった。⁽²⁴⁾ その菊栄は、均について、こう記している。

山川（均）が高橋ら青年たちを語って「私のところにきていた」というとき、それは私宅に起居を共にした意味でなく、住宅は別で『社会主義研究』や『前衛』の仕事と共にした意味である。弁護士山崎今朝弥が「山川は親

分子分の関係はきらいだ、自分で意識的にそれをさけている」と評したことが山川の耳にはいったとき、山川は会心のえみをもらした。山川は運動と私生活をわけ、私生活にはたがいにたちいらぬようにしていたが、これをものたりなく思っていた人もあるらしい。⁽²⁵⁾

これは、菊栄が均の死後編集された彼の自伝にわざわざ「編者注」として書き加えたものだが、客観的な記述に終始しているように見えながら、ここには、菊栄が均の指導者としてのありかたを少し離れた場所から眺めている様子がかがわれ、菊栄の「教育者」像と均のそれとに微妙なズレがあったことを感じさせる記述である。これは後述するように、菊栄と均のそれぞれの思想における「教育」の位置づけが異なり、そのことの反映と見ることができるとはなからうか。

人格はその文章に反映する。菊栄と均はその文体においても相違をなす。菊栄は、その文章の論理的な側面が評価されることも多かったが、⁽²⁶⁾そのことを考慮に入れてもなお、菊栄の真骨頂は、より歴史記述、人物描写の方面に発揮されていると見ることができよう。晩年の大佛次郎賞受賞作『覚書 幕末の水戸藩』はもとより、『武家の女性』等の社会史的著作、自伝『おんな二代の記』や『日本婦人運動小史』等の同時代史、『このひとびと』の人物評などに、その手腕があらわされている。

他方で均は、歴史記述は苦手で、自伝ですら憶劫がって最後まで完成させることができなかった。菊栄は均の死後、「かえらぬ夫へ」と題する均への追悼文で、次のように述べている。

『凡人の記録』（均の自伝）といえ、なぜ私（菊栄）があんなにすすめたのあなた（均）が時評的な原稿にばかり時間をかけて、『凡人』のつづきをあとまわしにし、落ちついてから「あれを書けなかったのが残念だった」というようなことになったのか。私のみるところでは結局あなた自身「あれから先は運動の歴史になるからむつかしいよ、僕には歴史はニガ手だから」といつてらしたように、あなたは歴史の記述よりも理論的な考察、批判の方に関心をひかれ、その方にすぐれていたからでしょうね。殊に過去よりも現在および未来の動きの方に興味があったせいでしょうね。⁽²⁷⁾

歴史記述にその才能を発揮した菊栄とは異なり、均が得意としたのは、もっぱら理論的考察だったのである。

菊栄と均にはこのように、ある対照性を見いだすことができるのであるが、二人は仲の良い夫婦として知られていた。菊栄と均の双方をよく知る堺利彦はこの夫婦を評して「おおよそこのくらい立派な、このくらいすばらしい、似合いの夫婦がめったに世の中にあるものではない。後に山崎伯爵は「均菊相和し」という熟語を製造したりした⁽²⁸⁾と述べている。

しかし菊栄と均の仲の良さは、いわゆる夫唱婦随といったあり方ではなく、とりわけ均は、努めて互いの思想的独立を目指していた。均は言う。

夫であるから、親であるから、先輩であるからというなんらかの権威のために私の考えが無条件に受けいれられ

るとしたならば、これは私の趣味でない。だから私は、妻からも子供からも、先輩としての威厳をみとめられないように、私の考えが彼らに影響をあたえぬように——すなわち天野流（「天野教育勅語」のこと）に敬愛されないようにつとめて来た。⁽²⁹⁾

互いの思想的独立をめざした性格の異なる男女が社会運動にそれぞれの人生を投ずるとき、たとえその主張に多くの共通点が認められようとも、それぞれの思想が自律性を持つのでなければ嘘である。次節では、二人の主張の検討のもとに、その思想的相違を具体的に明らかにする。

第二節 模索と葛藤 一九二〇年代

① 菊栄の新婦人協会批判と均の普選運動否定論

菊栄による新婦人協会批判について論じられるとき、決まって同時に言及されるのは、均の普選運動否定論である。〈均の普選運動否定論に従って、菊栄が「新婦人協会」を批判した〉という解釈に、ほとんどの先行研究が従っている。

日本で最初の女性による政治運動団体「新婦人協会」（一九二〇～一九二二）は、一九二〇年三月二八日、平塚らいてう、市川房枝、奥むめおという全く性格の異なる三人を理事として発会式をあげた。その発会式には、男性二十名を含む約七十名の参加があり、各種の新聞も新婦人協会の発会を好意的に取り上げている。⁽³⁰⁾ 新婦人協会は人々に大

いに期待され、注目されていた。

この新婦人協会の発会に約一年遅れて、一九二二年四月二四日、菊栄を中心とする赤瀾会が結成される。しかし、実質上「社会主義同盟」婦人部にあたるこの赤瀾会の結成は、新婦人協会の結成時の華々しさとは対照的に、一般人々に注目されず、新聞にもほとんど取り上げられなかった⁽³¹⁾。そして、この結成から約二ヶ月後の七月、「新婦人協会と赤瀾会⁽³²⁾」と題された菊栄の新婦人協会批判の一文が、雑誌『太陽』に掲載される。

この菊栄の『太陽』掲載の一文は、先行研究において頻繁に引用され、その中の「思想の幼稚不徹底」「運動方法の醜悪愚劣」「女遊民のおべんちゃら」という新婦人協会に対する批判的言辞を根拠として、菊栄の協会に対する態度は、「むきだしの『敵意』⁽³³⁾」であり「社会主義革命運動における民主主義闘争の重要性をまったく無視した⁽³⁴⁾」ものと解釈されてきた。そして、そのような〈民主主義的女性解放運動の意義をまったく理解しない教条主義的社会主義者〉という菊栄像が呈示される⁽³⁵⁾ときの常として、菊栄の像は、民本主義批判ならびに普選運動否定論の時の山川均の像と重ねあわされているのである。

一九二〇年代前半の日本国内政治の最も重大なテーマの一つ、普通選挙法について、均は「無産階級運動が議会主義によって去勢せられる危険⁽³⁵⁾」を強調し、「時としては、議会の門をくぐらぬことが、かえって議会の門をくぐる以上に有効に、議会におけるブルジョアの政権と闘うことになる⁽³⁶⁾」と述べた。均は普選運動に対する「無産階級」の戦術として「明白な意識的積極的の棄権⁽³⁷⁾」を主張したのである。このような均の普選運動に対する否定的態度は、かねてからの彼の一連の民本主義批判と表裏一体である。均は、大山郁夫の「国家生活と共同生活」(『新小説』一九一七

年二月号) に対する批判 (「沙上に建てられたデモクラシー」、吉野作造の「民本主義の意義を説いて再び憲政有終の美を済すの途を論ず」(『中央公論』一九一八年一月号) に対する批判 (「民本主義の煩悶」) 等によって、「いわゆるデモクラシーのチャンピオン等を片端からなぎ倒した」⁽³⁸⁾。

これら均の、大正デモクラシーの主流に棹さした一連の論文に対しては、「社会主義理論家としての卓拔さ」というプラスの評価と、「民本主義の持つ積極的な意味を十分に認めなかった」というマイナスの評価とが、(そのどちらに重きを置くかには様々なヴァリエーションがあるにしても) 同時に与えられるのが一般的である。そしてそのような「民本主義」という名の「民主主義闘争」の意義を軽視した均」という均のイメージに基づいて、菊栄についても、「新婦人協会」という名の「民主主義闘争」の意義を軽視した菊栄」という像が造りだされているのである。

確かに、新婦人協会批判の時の菊栄の態度がこれまでの歴史研究において批判され続けてきたことには、それ相応の根拠がある。赤瀾会当時の菊栄の論調の激しさには、ロシア革命の衝撃から醒めやらぬ当時の社会主義者たちの「革命気分」の影響もあるのだろう。⁽³⁹⁾ しかし、当時の社会主義者の多くにみられるその「革命気分」を菊栄のうちにも見いだせるからといって、即、均の普選運動に対する態度と菊栄の新婦人協会批判を同一視するには、そこに議論の飛躍がある。

以下、均の普選についての議論と菊栄の新婦人協会批判を同一視できない理由を挙げる。

まず第一に、菊栄の新婦人協会批判は、それだけに限って言えば、「民主主義闘争」云々という次元の問題ではないということである。

菊栄と（新婦人協会の中心人物たる）平塚らいてうの間には、母性保護論争⁽⁴⁰⁾以来の思想的対立があったものの、菊栄の論説「新婦人協会と赤瀾会」における批判の矛先は、新婦人協会の綱領や規約の抽象的な原理原則に向けられているのではなく、むしろその具体的な運動方法、殊に平塚らいてうによる新婦人協会の「私物化」に向けられている。新婦人協会の財政的な逼迫をしりめに、まとまったお金が手に入ると高価なメロンを買って食べてしまうような、らいてうの金銭感覚、そして彼女の気分本位の態度。新婦人協会の機関誌『女性同盟』の原稿は毎回らいてうのために遅れてしまい、新婦人協会という団体の運営上どうしても掲載されねばならない原稿も、彼女は「書く気分になれない」と放棄することがあった。⁽⁴¹⁾新婦人協会では平塚らいてうの補佐にまわった観のある実務家肌の市川房枝は、当時の苦労もあってのことか、菊栄の新婦人協会批判について「奥氏がいうほどの悪口⁽⁴²⁾ではなく、（山川）氏の立場としては当然の批判であろう⁽⁴³⁾」と述べている。

〈「民主主義闘争」の意義を軽視した菊栄〉という像は、菊栄の文中の「労して益なき議会運動⁽⁴⁴⁾」という表現から引き出されたものであろうが、新婦人協会のメンバー自身もまた「愚劣な議会運動⁽⁴⁵⁾」（平塚らいてう）、「議会運動とはなんとむなし、寂しいもの⁽⁴⁶⁾」（奥むめお）と表現しているのであるから、菊栄が新婦人協会のメンバーを批判したからといって、即、「民主主義闘争」を否定したことはない。また、新婦人協会の理事の中で唯一人、協会の活動から離れた後も徹底して「議会主義」を貫いた市川房枝について、菊栄は「（市川）氏は平塚氏と異なつて、真面目な実務家であるとは一般の風評である⁽⁴⁷⁾」と述べて、らいてうとは切り離して高く評価していることも考慮に入れば、菊栄の新婦人協会批判の本質を「議会主義」批判と見るのは不自然である。

菊栄の批判の主旨は、民主主義闘争としての「議會主義」を思想レベルで論じることにあるのではなく、「真面目」さに欠けるらいてう個人を批判することにある。したがって、均の、純粹に思想的、理論的な対立として提示された一連の民本主義批判および普選運動否定論とは性質が異なる。

第二に、菊栄の発言方法に見られる相対主義的志向を考慮に入れば、議會主義や「ブルジョア婦人運動」に対する菊栄の考え方を、雑誌『太陽』における批判のみに依拠して引き出すのは、不適切だということである。

ここに言う菊栄の相対主義的志向とは、その一例として彼女の婦人参政権論を挙げるならば、すなわち、婦人参政権否定がその場の支配的空気となっている場合には、菊栄は強力に参政権の必要を説き、逆に参政権さえあれば女性解放されるという極論が主張される段になれば、彼女はそれをセンセーショナルに否定する、といった形であられる方法上の特徴である。⁽⁴⁸⁾この傾向は、婦人参政権問題に限らず、廢娼運動、女子教育問題等への発言にも共通している。(そして、この相対主義的志向こそが、菊栄の発言についての批評を行おうとする我々に、おのずと歴史的文脈との関連づけを要求するのである。) 菊栄は「ブルジョア婦人運動」全般に対し、批判を加える一方で同時に正しくその運動の持つ積極面を理解していた。確かに、雑誌『太陽』での論争にのみ限定すれば、奥むめおの反批判に対しても菊栄は最後まで新婦人協会に対して強い態度をとり続けたが、他方で菊栄は、同時期に、別の雑誌においては、「ブルジョア婦人運動」の先駆けたる青鞥社の活動を高く評価している。菊栄は、「(青鞥派の活動は)ブルジョア婦人の間に、ある革新的気分、ある覚醒を呼び起したことは事実である。そしてこの運動に至ってはじめて、日本婦人は漠然ながらも運動の真意義、その中心思想を明白な理論として、意識するにいたったのである」⁽⁴⁹⁾、さらに「青鞥社

同人は、伝来のその狭い檻を破って見せた。彼らは筆に口に、そして実行の上に、旧道徳を破壊した。殊にそれが良心の名に新道徳の名においてなされたところに無限の力があつた⁽⁵⁰⁾と評している。

菊栄は決して、「むきだしの『敵意』⁽⁵¹⁾」によって感情的になり「民主主義闘争の重要性をまったく無視⁽⁵²⁾」したわけではなかった。むしろ、そんな感情的な態度とは逆に、菊栄の発言方法は、当時すでに社会的権力の様相を呈し始めたジャーナリズムを意識した、彼女の計算に基づくものなのである。菊栄は、新聞雑誌が女性の問題に及ぼす影響を重視していた。女子教育の強化は彼女のかねてからの主張であるが、新聞雑誌もまた、菊栄にとっては女子教育の手段として位置づけられている。菊栄は言う。

私共は、先づこの女子を誤る女子教育より、私共自身を救はねばならぬ。(中略) 教育とは必ずしも教室に於ける授業のみの謂ではない。新聞雑誌も又、重大なる教育機関である。故に私共は、言論に依り、実行に依り、専ら誤れる教育の打破に任じて、後より来る者の為に道を開く⁽⁵³⁾の責がある。

菊栄がジャーナリズムの反応を強く意識し、かつ、それに絡め取られまいと悪戦苦闘していたことは、彼女の次のような発言によってもわかる。

婦人にして社会運動に参加する者のあまりに稀なる結果は、現に参加している少数者を、たちまちにして社会の、

否ブルジョアのジャーナリストの寵児たらしめる嫌いがある。赤瀾会のごときも、新聞の提灯持ちのお蔭で、その実質以上に買被られている観がないでもない。(中略)けれども、婦人自身としては、もはやそのような、装飾的意味に甘んじている時ではない。婦人は婦人として、真に実質ある有意義な寄与をしないかぎり、その社会運動の意義は失われることを覚悟しなければならない。⁽⁵⁴⁾

一九一一年の平塚らいてうの「元始女性は太陽であった」「新しい女」という卓越したキャッチフレーズも、一九二〇年代に入ると「今日ではもはや特異の刺戟を与えぬまでとなり」⁽⁵⁵⁾既存のイメージにまみれてしまっていた。菊栄は、もう既に新しくない「新しい女」らいてうとの違いを極端なくらいにはっきりさせておかなければ、自らの主張も「新しい女」という言葉と一緒に捨てられてしまうという危険を察知したのであろう。⁽⁵⁶⁾世間の人々に、らいてうの新婦人協会だけが女性の社会運動であるという印象を与えてはならなかった。菊栄の『太陽』論文のセンサーシヨナルな側面は、このような状況に即して、その「教育」的効果を計算した上で意識的に作られたものではなかったか。

ただし、その菊栄の計算が、結果的に成功に終わったと言うことはできない。女性の社会運動を「装飾的意味」から脱して「真に実質ある有意義な寄与」を為しうるものに変えていこうと考える菊栄にとって、ジャーナリズムは一時的に利用するものではあっても、最終的な拠り所ではない。菊栄は、「実質」が重要だと自ら強調しながらも、結局、赤瀾会を「実質」の伴なった運動にすることはできなかった。彼女は、ジャーナリズムの持つ力を過信してし

まった。奥むめおが、「山川女史その他の赤瀾会の人々が徒らに弥次半分の知識階級や、低俗なジャーナリストや、愚直な警官などを相手にしないで、一日も早く労働者婦人の間に身を投ずる事に依って、その団体的威力を以て、私共婦人の解放のために何等かの実際運動に出でられんことを希望して止みません⁽⁵⁷⁾」と述べたのは、確かに、当時の菊栄の弱点を突いた指摘なのである。菊栄がジャーナリズムの持つ世論形成の力に着目したこと自体は評価されても、赤瀾会を「実質」の伴った団体にできなかったという点においては、菊栄が批判するところの新婦人協会の人々と何ら変わるところがない。

このように赤瀾会や菊栄の新婦人協会批判にも欠点があったことは確かだが、〈菊栄が「民主主義闘争」の意義を理解しなかった〉という批判はあたらない。菊栄の新婦人協会批判と均の普選運動否定論は、たとえその使用する言葉に表面上の類似があったとしても、同列に論ずることはできない。それぞれ固有の文脈においてあらわれた議論なのであって、菊栄の新婦人協会批判は、均の普選運動否定論とは切り離して評価検討されるべきである。

② 均の「無産階級運動の方向転換」と菊栄

〈均の女性版としての菊栄〉像は、均の「無産階級運動の方向転換」⁽⁵⁸⁾（一九二三年夏、以下「方向転換」論と略す）と菊栄との関係をめぐる解釈の中で、最も明確な形をとる。均の「方向転換」論を受けた形での〈菊栄の方向転換〉という解釈がそれである。

しかし、そのような菊栄観は、菊栄と均の間にある本質的な相違を看過したものである。菊栄にも、むろん思想的

転機はあった。しかし単なる思想的変化や態度の軟化を安易に「方向転換」と呼ぶならば、均や菊栄に限らず人間は皆、老いるにつれて多少なりとも「方向転換」するのだということになってしまふ。本稿で用いる「方向転換」は固有名詞であるという点に注意されたい。

均の「方向転換」論のキーワードは「大衆の中へ！」である。均は無産階級運動を二段階に分けて考える。まずは少数の者が、その思想を純化、徹底させ、進むべき方向を見極めなければならぬ。この「思想の純化」の結果として「前衛」たる少数者は必然的に「大衆」とは分離してしまう。(この思想の徹底化に伴う「大衆」との分離を、必然と捉えているところに着目してほしい。) いったん第一段階であるこの必然の分離の過程を経て、一般大衆と離れてしまった「前衛」は、徹底化した思想を携えて、「はるかの後方に残されている大衆」を動かすために、「大衆の中へ」戻ってこなければならぬ。思想の徹底化という第一段階から、大衆の中に戻ってくるという第二段階への「方向転換」が、均の主張する「方向転換」論である。第一段階として、思想を徹底化させるために「議会主義」を否定してきたが、今後は第二段階として、経済闘争のみならず政治闘争にも着手し、議会や政府に積極的に関わろう、という論旨である。

この「方向転換」論は、その後の日本の社会主義運動に絶大なる影響力を持ったことで知られているが、このような理論を打ち出した均は一般的に「英雄的なことばによってではなく、平凡な実践の積み上げによって結果としての指導性を確立してゆく社会主義的人間の理想⁽⁵⁹⁾」とイメージされている。しかしその均の良心的な「方向転換論」にさえ、次のような傾向を見いだせるのではないか。すなわち、彼の論における思想の「徹底化」「純化」という発想、

さらには、そのような「純化」によって人は「一般大衆」に近づくのではなく分離してしまうという発想は、ロジック重視で、「大衆の中へ！」というかけ声とは裏腹にエリート主義的なのである。均によれば、思想を純化すればするほど必然的に一般大衆と離れていくはずであるのに、それを「大衆の中へ」という標語によって、つまり頭の中で組み立てたロジックに従って、無理矢理戻すのだ。むろん後述するように、そのような運動論に主体性を養う契機を見いだして評価することも可能ではある。しかし、一方で「大衆と共に動く」と言いながら、他方で「大衆」との分離の過程を必然と捉える均のイメージの中では、「大衆」は動かされるものであり導かれるものなのだ、ということを確認しておかねばならない。

均の「方向転換」論は、均自身が述べているように、「無産階級運動の方向転換」というよりは、むしろ均自身の「方向転換」の表明であった。⁽⁶⁰⁾このことは、「方向転換」論をめぐる菊栄と均との思想的相違について考える上で重要な意味を持つ。〈菊栄の方向転換〉という解釈は、先行研究の中で自明のことのように強調されてきたのだが、実際には、「方向転換」論が発表された一九二二年から五年以上の間、菊栄はほとんど「方向転換」論について言及していない。彼女は、一九二八年に入って数回、「方向転換」論と婦人解放運動との関係に触れており、それが〈菊栄の方向転換〉という解釈の根拠として用いられてきた。⁽⁶¹⁾しかし、その菊栄の記述においてさえも、「方向転換」論の影響を受けたとされているのは、あくまで婦人運動であって、菊栄個人ではない。

こうしたことを前提として、以下、〈均の「方向転換」論に従って菊栄も「方向転換」した〉という解釈の問題点を、三点挙げてみたい。

第一に、均と菊栄の間には十歳の年齢差があるため、均が平民社時代の社会主義者と直接に接し一九〇七年の幸徳・田添論争を間近に見て幸徳秋水のアナルコサンジカリズムの決定的影響を受けたの⁽⁶²⁾に対して、菊栄が社会主義と直接接したのは一九一六年（大正五年）に入ってからのもので明治社会主義からの影響をほとんど受けなかった、という时期的なズレの問題がある。均はその自伝で「大正五、六年以来、労働者階級の大衆性のある運動の可能性が見えてから、私は初めてマルクス主義をほんとに学び始めたので、私自身にとってはこの時から方向転換の時期が始まっていたわけだが、実際にはなかなか観念的な革命主義の古いカラを破ることができなかつた⁽⁶³⁾」と述べているが、これに従えば、菊栄が社会主義と直接出会った時には既に均の方は「方向転換」へと歩みはじめていたのであって、菊栄までもが「方向転換」を必要としたと考えるのは不自然なのである。

第二に、均のいう「方向転換」は、その論旨からいって、思想の「純化」「徹底化」を前提としている。つまり「民主主義闘争」の徹底的な否定を前提としている。そして確かに均に限って言えば、その「ブルジョア・デモクラシー」及び「民本主義」批判の経緯からいって、前提たる「純化」を個人的に実践してきたといえるであろう。しかし、菊栄について言えば、菊栄の論敵が必ずしも「民主主義闘争」を標榜しているわけではなく、新婦人協会批判にしても、「民主主義」対「社会主義」という構図に当てはめて、それで済むものではなかつた（第二節①参照）。社会主義者たちだって「女性解放」という点において必ずしも自分の味方であるとは限らなかつた。そのような状況の下では「純化」は不可能であるし、そもそも菊栄は、「純化」志向の体系的なロジックの学習から「社会主義」に入つたのでもなかつた（第一節参照）。「純化」のない「方向転換」とは形容矛盾であつて、そこに〈菊栄の方向転換〉と

いう解釈の不自然さがある。実際、菊栄自身、社会主義思想史上の事件としての「方向転換」論について言及することはあっても、自らの思想的変化を「私の方向転換」と呼んだことはないのである。

第三に、均の「方向転換」論とほぼ同時に出された菊栄の論文には、「方向転換」どころか、「議会主義否定」そのものと受け取られても不思議でない表現があらわれる。⁶⁴つまり、この時点での発言の一部を取り上げて言うならば、菊栄と均の主張のベクトルは逆方向を向いている。もちろん菊栄の主張は相対主義的なものであるから（第二節①参照）、それが均の「方向転換」の否定を意味しているわけではないが、同時に、菊栄の発言は、均と歩調を合わせて形成されているのではないことも、この点から明らかである。

これらのことを考えあわせれば、菊栄の発言や行動を殊更に均の「方向転換」論と結びつけるのは不自然である。そして、均が「方向転換」を必要とし菊栄はそれを必要としなかったというこの違いが重要な意味を持つのは、それが単に部分的な差異ではなくて、根本的な精神的態度の相違を表しているからである。

「方向転換」は、単なる自然な思想的変化の謂ではなくて、多かれ少なかれ主体性が前提された作為的な働きである。「前衛」が「大衆」との必然的な分離の過程を経て「大衆の中へ」戻って来るという想定的前提となっているのは、自己と他人をはっきりと区別することができる強固な主体性を持った人間像である。のちに均を批判して現れる「福本イズム」に日本の天皇制社会の公私未分離に対抗するある種の「主体性」を見るならば（藤田省三⁶⁵）、程度の差こそあれ、均の「方向転換」論にもまた同様の性質を見ることができるといえる。均が「ズルズルベッタリ」そのものなのではなくて、主体的なあり方を主張する一方で状況に従うことをも要求する均の半端さが問題だったのだ。だから、

福本は「真の方向転換」を唱えて現れる。均と福本は対極にあるのではない。人を動かす力の源泉を理論であるとして、均は理論に依拠しようとする点において、均の「方向転換」論も「福本イズム」も一つの延長線上にあるし、それゆえに均は、理論の徹底化を図る「福本イズム」の側からの「折衷主義」という批判に対抗する有効な手だてを持っていないのである。

菊栄の場合、そもそも日本の主客未分離の精神風土に狭義の「主体性」を以て対抗する傾向は稀薄で、共同体を拒むよりもむしろ重視し、実際の「団体生活」の中で経験を通して行われる「訓練」、広い意味での「教育」に活路を見いだそうとする傾向にある（本稿第二章参照）。菊栄は「団体生活」を重視して、次のように述べている。

智力の練磨、同情や理解の發達は、元より団体生活を措いて他に得らるべきではない。団体生活は、實に人類發達の秘鑰であり、文明の最初の恩人であつた。一社會の文化は、団体生活の發達如何に依てトし得るのである。

然るに婦人に在ては、私有財産制の上に立つ孤立的な父權家族の成立以來、然く重大な意義を有する団体生活が、全く禁絶せられてしまつた。法律や道德や習慣は、十重二十重に婦人と社會との間に垣を作つて、外間との交通の道を一切斷絶してしまつた。団体生活が禁ぜられた時は、即ち進歩の道の塞がれた時である⁽⁶⁶⁾

菊栄が「団体生活」を重視しながらも「家」——それはある種の小団体には違いないが——を否定的に論じていることから明らかなように、菊栄が「団体生活」と言うとき、彼女がイメージしているのは外部と切れることのない

開かれた共同体であつて、そのような「団体生活」の強調は、公的空間から切り離された私的日常生活を再び公共性として規定し直そうとする側面をもっている。ゆえに菊栄によれば、福本和夫が唱えるような理論による社会との「切断」など、たとえそれが小団体として、「組織体として切れようとした」⁽⁶⁷⁾のであつたとしても、許されるものではない。「自己」と社会を切り離して、その交渉を穢らわしいとする「ようなありかたを、菊栄は徹底して排したのである。⁽⁶⁸⁾均が「方向転換」を必要とし菊栄がそれを必要としなかつたという違いは、このように、日本の精神風土との対峙の仕方の相違にもつながっている。そしてそれは、日本の〈歴史〉へのまなざしの違いとして現れてくるのである。

③ 関東大震災時の朝鮮人虐殺事件をめぐる

均が言う意味での「方向転換」ではなかつたが、むろん菊栄にも、その思想に本質的な変化が起こる契機はあつた。菊栄の思想が外部の理論の借り物の言葉を脱して、真に独自の思想としての形をとりはじめるのは、一九二三年九月一日の関東大震災を経てからである。この大震災は、「婦人解放」の問題を「理論上の問題でなく、眼前直接の生活上の問題とした」⁽⁶⁹⁾（傍点山川）と菊栄は言う。これは、女性一般、「婦人解放」論一般についての説明である以上に、菊栄本人の震災後の変化を語つたものだといつていい。自宅の倒壊と「社会主義者狩り」の二重の死の危険にさらされた菊栄は、この震災を契機に、「生活」の重みに耐えうる思想へと一層近づこうとするのである。菊栄がこの震災でうけた衝撃は、一つの都市が単に物理的に倒壊したことによるのではなく、「その醜い生地を暴露させられた」⁽⁷⁰⁾日本人の精神的側面を垣間見たことであつた。「朝鮮人襲来の流言に迷うて無辜の民衆を虐殺した出来事はそれである」⁽⁷¹⁾。

震災直後の菊栄の思想的変化の重要な一側面は、菊栄が、「婦人解放」問題を民族差別との関連で論じ始めるようになったことであろう。震災でおこった朝鮮人虐殺事件について菊栄はこのように言う。

変災に乗じたこの（朝鮮人襲来の）流言が、いかに時機と方法とにおいて巧妙をきわめたにせよ、いろいろの事実から推して、多少なりとも冷静な考察力をもつ者は疑わずにはいられぬような事実をほとんどすべての民衆が一も二もなく信じ切ったについては、そこに国民全体にわたる教養の欠陥を語るものがなくてはならない（中略）日本人が一般的にいま少しく精神的訓練あり、いま少しく人命の貴重さを知り、人道の何たるかを心得ていたならば、あれほどの残虐は行われなかったであろう。褊狭なる愛国主義、封建的な尚武思想、排他的な島国根性⁽⁷²⁾！

そして菊栄は「人種的偏見・性的偏見・階級的偏見」というタイトルのもとに、「人種的偏見」、具体的には「朝鮮人、台湾人等、異種族の国民」の問題に言及する。排日法案を上院において通過させたアメリカに対する当時の日本国内の非難の声を受けて、菊栄は一方で「排日は国際精神に悖るもの」としながら、他方で日本人の排日批判の内に潜む欺瞞的側面を指摘する。

米国に向かって、正義人道、人種平等を主張してやまぬわが日本人は、果して米国に向かって求めつつあるよう

な、正義人道、人種平等を實行しているだろうか。かつてサンフランシスコの大震災大火の際に、米国の軍隊と警官とは、これを排日と人種的偏見を表現する千載一遇の好機として、日本人の大屠殺を試みたことがあるだろうか。昨秋の大地震に際して、朝鮮人と労働者とが遭遇したような運命に、日本人は米国で遭遇したことがあるだろうか。朝鮮人、台湾人等、異種族の国民に対して、政治的、社会的、経済的に、内地人と平等の待遇が与えられているだろうか⁽⁷³⁾

「異種族の国民」も女性も、同様に「劣等民」として様々な領域から排除されている。このことに対して、なぜ日本人は米国に対すると同様、「正義人道」の声を挙げないのか、と菊栄は言うのである。

「国民全体にわたる教養の欠陥」を嘆きながらも、菊栄が日本人に対して持ったのは悲観ばかりではなかった。殊に震災当時の女性の活動に対しては、菊栄は感動をもって賛辞を送っている。

生死の苦しみと戦って彼ら（震災で虐殺された人々）を生みかつ育てた母親たちの心境に、女として母として誰が涙をそそがずにいられよう？ 日本婦人は人道の名において、母性の名においてかくのごとき惨劇を永久に反復せしめざらんことを期せねばならぬ。東京の婦人団体聯合会が甘粕大尉の虐殺事件に対し、人道の名において抗議を發表したのはまことに意義あることであった。大震災の当時、看護婦が一身を賭して患者を救護した壮烈な美談は永く日本婦人の誇りとして伝えられるであろう。人命保護に対して爾く献身的な勇気をもつ婦人、人

の生命を奪う代りに人に生命を与えることを本分とする婦人が、今後、今回のごとき残虐行為を防止すべく、平和と人道との名における大々的な運動を起さねばならぬことは当然であろう。⁽⁷⁴⁾

これが、これまで一貫して「母権主義」に偏りすぎることの危険を説き続けていた菊栄その人の発言であることに留意せねばならない。菊栄は、この後の大戦中の女性団体による「母性」の名における戦争協力に、当時の女性としては例外的に手を貸さずに抵抗し得た一人でもある。その菊栄が、このとき、これほどまでに女性たちの活動に手放しの賛辞を寄せ、自ら東京連合婦人会や公娼廃止期成同盟に参加して積極的に社会主義団体以外の女性グループとの関わりを深めることになったのには、おそらく当時の社会主義者たちが震災時に何らの生産的対応策も打ち出さなかった、あるいは打ち出せなかったことと無関係ではあるまい。

社会主義者たちが皆、菊栄と同様に朝鮮人虐殺事件に対して抗議の声を挙げたわけではなかった。当時の社会主義者たちの態度については、(亀戸事件や大杉事件に対しては真相究明や責任追及の活動を行ったにもかかわらず)朝鮮人虐殺事件に対しては無関心な態度をとり続けた、との批判的指摘がある。⁽⁷⁵⁾ 均もほとんど朝鮮人虐殺事件については言及していないこと⁽⁷⁶⁾を考えると、菊栄の朝鮮人虐殺事件への言及は、社会主義者たちの中で例外的なことだったといえるのではないだろうか。こうした中で、女性団体の活発な活動をまのあたりにした菊栄は、おそらく、危機的状況において真に人間を導くものは「理論」ではなくて、「生活」の中で行われる「訓練」だと考えるようになったのではないか。菊栄は「日本人が一般的にいま少しく精神的訓練あり、いま少しく人命の貴重さを知り、人道の何たる

かを心得ていたならば「朝鮮人虐殺はなかっただろうと述べる。足りないのは「理論」ではない。欠けていたのは、菊栄によれば「精神的訓練」である。

菊栄は震災を契機として、「理論家」たることと訣別したのである。菊栄が「階級」の問題を、「階級的偏見」と言い、さらに女性や人種の問題と同列に並べた時、菊栄の「社会主義」は、もはや狭義の「理論」や「科学」としての「社会主義」の範囲を逸脱している。むろん、菊栄によれば「精神的訓練」は「団体生活」の中でのみ可能であって、遙かな原始の昔に日本にもあったと菊栄が仮定する「団体生活」こそ彼女の「社会主義」のイメージなのであるから、菊栄が「社会主義」を捨てたと言うことはできない。しかし菊栄は、自らが「社会主義」と呼ぶものを、「生活上の問題」という、この段階ではまだ漠然とした表現によって表されているところのものとして意識するに至ったのである。

④ 「婦人部論争」前後

「婦人部論争」とは、一九二五年五月に結成された日本労働組合評議会の内部に「婦人部」を設置するか否かを議論したものである。⁽⁷⁷⁾日本の労働組合は、初期の友愛会の時点でさえ婦人部を持っており(一九一六年)、既に解決済みだったはずの婦人部問題が蒸し返されたような形であった。⁽⁷⁸⁾

この「婦人部論争」における菊栄の婦人部設置提案と、論争の後の婦人同盟への彼女の非協力は、これまで一般的に、「山川イズム」対「福本イズム」の「代理戦争」として説明されてきた。すなわち次のような解釈である。

「婦人部問題」の大論戦の裏面の原因は、そのとき評議会の最高の指導幹部であった渡辺政之輔氏と、その背後の師であると同時に「共産主義者グループ」の指導者で社会主義者の「大御所」といわれていた山川均氏とにたす、新興の「福本主義派」の対抗であったと思われる。婦人部問題は、現代語でいえば「代理戦争」のようなものだった⁽⁷⁹⁾

(福永操『あるおんな共産主義者の回想』)

「代理戦争」という解釈に暗に含まれているのは、「婦人部」の問題、すなわち女性の問題を、社会主義革命の成否如何によって左右される副次的なものともみなすニュアンスである。菊栄もまた、そのような思想的立場に立ち「婦人部論争」を「代理戦争」と捉えていたと言えるだろうか？——答えは否である。

菊栄は、婦人部設置反対派は「最も消極的な、不活潑な自然生長論者」⁽⁸⁰⁾であると批判する。この用語法は、菊栄のパロディーだ。「自然生長論者」という言葉は、福本和夫らが山川均を批判するときに盛んに用いたものだが、それを、逆に婦人部設置反対派に向けることによって、菊栄は〈婦人部設置賛成Ⅱ山川イズム、婦人部設置反対Ⅱ福本イズム〉というイメージを崩すのだ。婦人部の問題を「山川(均)派」対「福本派」という既存の構図に解消することを、菊栄はここで明白に拒否しているのである。

「婦人部論争」の議論における菊栄の思想的展開は、それを均と福本の対立の「代理戦争」とみなすことによって見えてこない。「婦人部論争」で福本派の対極にあるのは、均的なものではなくて、菊栄的なものである。

菊栄と均は、「婦人部論争」に関する論文をまとめた『無産者運動と婦人の問題』(一九二八年)を共著として出し

ているが、そこにおける二人の「婦人部」についての主張には内容的に重なる部分が多い。全部で九編収められた論文のうち、菊栄のものが六編、均のものが三編、という数字にも表れているように、「婦人部」の議論については菊栄がリーダーシップをとっている。菊栄の提唱する婦人部の「テーゼ」は極めて具体的な要求によって構成されており、(例えば八時間労働制、乳児を有する母親に三時間毎に三十分以上の授乳時間を与えることなど)菊栄の関心は、婦人部設置提案がマルクス主義的であるか否かという抽象的な「理論上の問題」には無く、具体的な女性労働者の「生活上の問題」にのみ向けられている。

菊栄を中心とする婦人部設置推進派の用語法で特徴的なのは、「特殊」という語の多用である。例えば、婦人の「特殊の負担」、「婦人の特殊事情」、婦人の「特殊な地位」に基づく「特殊な心理」、「婦人の特殊要求」、男性の「特殊心理」、問題に対応するための「特殊の方法」と「特殊の行動」といった形で。

そして婦人の「特殊」な状況は、主に家事労働や育児との関係で説明される。

婦人が真に解放され、真に男子と平等になるためには、個人主義的な家政というものがなくなって、婦人が男子と共通の生産的労働に参加しうることが必要である。たとえ教育上、経済上、政治上の機会均等が認められていたところで、婦人が現在のごとく、消費経済に活動を制限せられ、家政に没頭しているかぎりには、名目上における平等の機会を利用する実際の条件が備わらない。(中略) 育児や家事に関する仕事を公共的に組織し、個々の婦人の負担をはるかに軽減して、婦人が自然から享けた特殊の負担を、社会的原因のために、いっそう苦痛な、

不幸な負担とならしめぬだけの設備が必要である。⁽⁸¹⁾

参政権などの「形式的平等」のみならず「家庭労働の社会化」が必要だというのは、菊栄の従来からの主張であるが、⁽⁸²⁾ここで新しいのは、彼女がそのような問題を「特殊」と規定した上で、その「特殊」を「特殊」のまま、公的であると考えられているところの「階級闘争」の領域に持ち込もうとしたことである。それに対し、婦人部設置反対派は、「婦人の特殊」という概念そのものを否定して「一般」に解消しようとし（具体的には、「婦人部」は作らずに既存の「組織部」や「教育部」によって問題を解決しようとする方法⁽⁸³⁾）、あるいは「特殊」を団体から排除しようとした（具体的には、既存の組合内部に「婦人部」を作することを許さず、外部に「婦人労働組合」⁽⁸⁴⁾もしくは「婦人同盟」⁽⁸⁵⁾を作る方法）。つまり「婦人部論争」では、既存の「マルクス主義の教科書」では説明のつかない「特殊」事態が可視的になったときの対応が問われていたのだが（すなわち他者の問題）、婦人部設置反対派がその「特殊」に目をつぶり「特殊」を外側へ排除してでも「教科書」を守ることに拘泥しているとき、菊栄は、「特殊」のありのままの姿から目をそむけるくらいなら「教科書」を書きかえることさえ辞さないのだ。

「婦人部論争」は、煎じ詰めれば婦納⁽⁸⁶⁾と演繹とのぶつかり合いなのである。「特殊」問題の具体的解決の積み上げを「階級闘争」とする菊栄の婦納法は、階級闘争の「全体性」「統一性」を主張してあくまで演繹的に女性の問題の解決を引き出そうと考える婦人部反対派から、批判の矢面に立たされる。論争は最初、労働組合のあり方をめぐって始まったのにもかかわらず、いつのまにか問題がすり替わり、菊栄は、組合の問題を取り上げたこと自体を批判され

るようになり、「階級闘争は政治闘争である」ことも認め得ない組合主義者⁽⁸⁷⁾「俗学主義」⁽⁸⁸⁾「無法則的追随主義」⁽⁸⁹⁾と非難される。そして批判者たちは、無産婦人運動を「意識的、政治的闘争」⁽⁹⁰⁾へ向かわせるべきだと主張する。それらの批判文には支離滅裂な読むに耐えない悪文も少なくないが、本質において菊栄の思想の特徴をつかみとっているものと言っている。菊栄を批判するとき、「意識的」と「政治的」とを並列させて強調しているのは単なる偶然ではない。「組合主義的経済闘争」を超えて「政治闘争」へ、と唱える批判者たちが前提しているのは、「作為」としての「政治」、作為の権力という概念であり、それとは相容れない要素を菊栄の運動論が持っていることを指摘しているのである。そしてその指摘は正鵠を射ている。ここで菊栄を批判する人々の強調する、マルクス主義の「全体」性、「意識的、政治的闘争」という言葉が、相互に関連しあっていることは、いうまでもない。つまるところ問題は「権力」観の相違に帰着する。

婦人部設置反対派が、そのような自他の相違を相違として認識できずに、対する菊栄を「政治」の作為性についての理解不足として葬り去ろうとしたこととは逆に、私は、彼女の「権力」認識に可能性を見いだしたい。菊栄は体系的に「権力」論を展開したことはないし、意識的に「権力」の意味を定義づけて用いたわけでもなく、「権力」という言葉の用語法は統一されていない。しかしその発言からは、「作為」論によっては捉えきれない日常性に潜むミクロな権力関係、いわば構造的な権力に思いを馳せていたことが読みとれるのである。菊栄は言う。

現在の社会を動かしているものは、表面、権利を代表している男子であっても、事実においては、その男子の意

思を動かすところの社会的条件こそ、基礎的、根本的な力である。だから婦人——そして同時に全人類——の解放を目がけるものは、闘争の対象を男性に求めるのではなく、その意思を支配している社会的条件に対して向けねばならぬ。その社会的条件が変わらないかぎりには、女子が男子の地位に立って政治を、経済を運用したところで、同じ社会的条件の支配するところにより、同じ結果を生み出すにすぎない。⁽⁹¹⁾

菊栄によれば、「力」は、個々の人間が作為的に行う努力如何の問題である以上に、全体としての人と人との関係性の問題である。菊栄が「社会的条件」と呼ぶところの構造が要なのである。そう考えたからこそ菊栄は、女性による社会運動が個々の男性に対する敵対あるいは懇願を以て解決となすことを、強く拒んだ。女性の問題は、社会構造のあり方を不問にしたままで女性が男性の今ある地位に徐々に取って代わって見たところで、根本的な解決とはならない、と菊栄は説く。故に「婦人同盟」のような性別団体を原則的には認めず、あくまで社会構造そのものの変革をめぐりとしたのである。菊栄にとって「性」は本質である以上に構造の問題であった。そしてそのような視点が、「女性問題」の射程を超えて、「性」の問題を民族問題や底辺社会の問題等と結びつけて考える思想的地盤を彼女に形づくらせることとなった。菊栄は、「ジェンダー（文化的性差）」という言葉が日本でまだ知られていなかったこの時代に、「ジェンダー」を語った、おそらく最初の日本人である。⁽⁹²⁾

婦人部設置反対派とその本質において対極にあったのは、主体性の保持と状況への追従とのあいだで妥協点を探る均流の「折衷」でも「中間」でもなく、菊栄流の徹底したこの「生活」主義である。均を「折衷主義」というならば、

それは、福本イズムのな作為的「政治」と菊栄的な構造的「生活」との「折衷」なのではないか。(しかしその均の理論構築の努力とて、「折衷」という言葉にニュアンス的に含まれる安易さとは程遠いものであつただろう。) 菊栄は、ロシア革命以後関東大震災までの数年の間だけ纏つた「理論家」的な衣を早々に脱ぎ捨てて自らの地の性質たる生活者のリアリズムに回帰したけれども、根っからの「理論家」である均は、「理論家」たることを放擲するはずもないし、かといつて非現実的な福本イズムの「理論闘争」にもついていけず、「理論」と「生活」の狭間で、あくまで「理論家」として接点を探し続けた。

「大衆の中へ」という思いは、菊栄と均とに共通するものだったし、「婦人部」問題などに代表される具体的提案に関しての二人の意見は一致することが多かったが、菊栄の思想の可能性は、均のそれとは異なる性質にこそ見いだせるものなのである。均と切り離して菊栄の思想を内在的に理解すること、それが、山川菊栄から学ぼうとする者にとっての、出発点である。

第二章 社会史へ——新たな知のかたちを求めて

「思想は、生活から出て、生活を越えたところに独立性を保って成り立つものであろう。そうであるとすれば、生活から出ないものと、生活を越えないものとは、ともに思想ということとはできない」

——竹内 好⁹³

本稿第一章においては、殊に関東大震災以後の菊栄が、「生活から出ないもの」は思想ではない、ということに自

覺的でありえた、当時としては稀な知識人の一人であったことについて述べた。菊栄が「生活」という語を多用したのは、彼女の周囲のインテリの「理論闘争」における抽象的な言説が、しばしば現実から遊離することに対しての苛立ちを表現したものであったが、その彼女の苛立ちを理解する者は少なかった。菊栄が「理論家」と捉えられている限りは、その「生活」の強調も、あくまで具体的に即した論説も、彼女の理論の骨格を曖昧にするノイズとしか受け取られなかったのだろう。リアリティを追求しようとする菊栄の意図は裏目に出て、〈不徹底な理論家〉という不名誉なレッテルを張られてしまう。彼女は、より正確に自らの思想を人々に示しうる新たな表現方法を、おそらく切実に、必要としていたのではないか。

菊栄がその新たな知のかたちとしての「歴史」に辿り着くには、長い試行錯誤を要した。かつて彼女は、次のように述べている。

日本の女にとつては、未来が一切である。過去も現在も語るに足りない、寧ろ語るに忍びない。私共を救ふものは唯だ未来である。然り私共を救ふものは、唯だ未来に對する希望、未来に對する信念、そして未来の為めに闘ふ勇氣あるのみである。⁽⁹⁴⁾

若き菊栄はこの時、「過去」としての歴史から切れた「未来」を強調していたのだった。そのころの彼女の眼には、日本女性の姿が、弱々しく知識に欠ける遅れたものと映っていたに違いない。実際に「お伽噺まで交えた平仮名づく

めの婦人版さえ読みこなし得ぬ⁽⁹⁵⁾」女性たちがいたからこそ、菊栄は「婦人部」設置を提唱したのもあった。女性の負の側面ばかりが目についていたであろう当時の彼女にとって、その女性たちの歴史など「語るに忍びない」ものだったのである。たとえ歴史に思いをめぐらしたとしても、それは実在さえ定かでない「母系制大家族」への憧憬に過ぎなかつた⁽⁹⁶⁾。学者の家系で東京育ちの学歴エリートたる菊栄は、病弱な上に、運動の指導者としての仕事に忙殺され、「大衆」の「生活」に実際に接する機会自体少なかつた。ゆえに、エリート主義的なものを観念的には否定し、「生活」の中での「訓練」の持つ可能性に対して考えをめぐらしていても、実感のレベルでそれに全面的な信頼を寄せるまでには、なかなか至らなかつた。

そのような菊栄が「歴史」へ向かうのには、偶然の力によるところも大きい。一九二九年に始まる大恐慌、一九三一年の満州事変の影響は人々の暮らしを直撃し、こうした社会情勢の変化が、山川一家の日常にも大きな変化をもたらさずにはいなかつた。菊栄はこの頃のことを後に振り返って、こう記している。

五・一五が起り、ファッショ風がふきつので、言論の自由は狭くなる一方でした。山川均はもともと原稿を生活の手段としたくない、できれば他の方法で生活し、書くことは自分の自由にしたたい、という望みでしたが、無資本で、病床でできる仕事はむつかしいので、不本意ながら原稿を書いて来たわけですが、それがむつかしくなつたこの際、ほかに生業を求めようと思ひ立ちました。(中略) そのころ鶏卵は暴落して養鶏業者はしょうぎ倒しになるさわざでしたが、うずらの方は有望だといつて人にすすめられ、昭和七、八年ころから着手しました。

がそれには住宅地の鎌倉より農村の方が便利なので、村岡村に土地を借り、九坪の禽舎二棟、孵化、育雛用の建物一棟、孵卵器二台、育雛器三台をおき、孵化育雛は山川園主の受け持ちで、湘南うずら園の看板をかけ、手伝いのじいさんをおいて玉子屋をはじめたのが昭和十一年の五月、二・二六のあとでした⁽⁹⁷⁾

このようにして始まる神奈川県鎌倉郡村岡村（現在は藤沢市内）での暮らしは、菊栄に重大な変化をもたらした。それは、やむなく始まったものであったかもしれないが、彼女に、現実の「大衆」の日常に自ら入り込む機会を与えたのである。

菊栄は、村岡村へ移ってからのことを、次のように記している。

こういう農村の生活は初めてのことであり、殊にあたり古い知人が一人もなく、全く土着の農家ばかりの中で暮すようになったことは、偶然ながら私にとってまことに貴い経験でした。近処のお百姓のおじさんから、「勉強になりますからやってごらんさい」と教えられて初めてジャガ薯を作りましたが、ジャガ薯作りだけでなく、生活全体が、私にとってはいよいよ勉強でした。追々に私は知る知らぬを問わず、誰でも彼でも勝手に先生に見立てて、知りたいこと、分らないことは片はしから教わることにしました。村の人たちはみな親切な良い先生でした。近処の人たちはもちろんのこと、道ばたで孫のお守をしているお婆さんでも、畑のへりで煙草休みしているお爺さんでも、相手かまわず、奇問愚問を発しましたが、厭な顔をする人はひとりもなく、迷子の子供に道

を教えるように親切によく話してくれました。⁽⁹⁸⁾

また、この時期の菊栄の心境は、列車の中で偶然乗り合わせた一人の女性労働者との会話について語った次のような文章の中にも表れている。

この婦人との會話は、私を心ひそかに驚嘆させずにはおかなかつた。(中略) その風采がいかにも平凡な、疲れた裏町のおかみさんにすぎないにもかかはらず、話の内容が要領よく、豊富だつたことに對する私の感銘は、いつまでも變らなかつた。そして私は私の多く接するその人と同年輩のインテリ層の婦人との比較を考へぬ譯には行かなかつた。それ等の婦人は幾種類もの新聞も讀めば、雑誌にも目を通す。けれどもその服装や生活が上品で氣がきいてゐるにもかかはらず、話の内容は、子供と家庭を中心とした自分自身の直接の個人的利害より一歩も出ない。一時間一緒にゐても、一日ゐても、一週間ゐても、一層廣い社會生活については全く觸れることもなく、彼女達から新しい刺戟や啓發をうけることはまづ望まれない。廿歳のころも、三十のころも、五十のころも、頭腦の内容にあまり變りはないといつてよい。どう見ても遙かに教育程度の高いはずのこの層の人々の中に、あの農民出の裏町のおかみさんだけの、生きた知識、生きた觀察が求められないのはなぜだらう。私が車中で出會つたのは例外的に頭のよい婦人だつたかも知れない。しかし一般に私が話して見て、農民や小商人の妻や職業婦人の方が、比較的教育程度も高く、生活も樂な、いはゆるインテリ層の婦人よりも、一般的に興味のある社會的事

實を話してくれることが多い。つまりそれだけ下積になつてゐる階級の婦人は、生活の問題が痛切であり、生活から直接學ぶ機會が多いのであらうと思はれる。⁽⁹⁹⁾

これは、『女は働いてゐる』と題された菊栄の評論集（一九四〇年）からの引用である。ここで描かれた女性労働者は、いかにも「平凡」で「疲れ」ているが、それでもなお、彼女たちが「働いてゐる」ことは一つの希望である。教育制度のもとでの学習から得たインテリの狭義の知識は、「働いてゐる」労働者たちが「生活」から得たものと比較すれば取るに足らないのだ、と菊栄はいう。ここで描かれた「農民出の裏町のおかみさん」の姿を、かつて彼女自身が救世軍のボランティア活動の経験をもとに描いた「みじめな」労働者像（本稿第一章第一節参照）と比較すると、われわれは、菊栄の「大衆」観が実際いかに変化したかを理解できるのである。

村岡村で農村の「生活」に入り込み、直接農民たちに接するなかで、菊栄はようやく、普通の働く人々の生活の内、にさえ社会変革の契機を見いだし得るといふ確信を得たのだ。もはや人々は、二項対立的に「前衛」に対置させられるところの「大衆」でさえなくなつてしまつて、菊栄の前で自らの「生活」と村の歴史とを語り始める。（それを聞き書きとして後にまとめたのが菊栄の『わが住む村』である。）ここに至つて、「理論」から「生活」へと彼女の主張は、もはや観念的な理想として「未来」に思い描くまでもなく、普通の人々の内に実例を見いだしうるものとして示されるのである。「理論」の学習に頼らずとも、平凡な「生活」のなかで行われる「訓練」が、人々を私的「個人的利害」の世界から公的な「一層廣い社會生活」へと連れ出し、人間を社会的な存在にすることができるといふその

ような一つの可能性への信頼が、菊栄の関心を、「未来」から、いかにして「訓練」は行われ得るのかという問題意識に基づく「過去」の分析へと転回させたのである。

このように内的に変化しつつあった菊栄に、柳田國男（一八七五—一九六二）との出会いは決定的な影響を与えた。昔の女たちの刀自としてのありかたに「文字こそ知らないがいちばん正確なる意味に於ける學者⁽¹⁰⁰⁾」の姿をみる柳田と、「理論」に依らない「生活」の中での「訓練」について模索する菊栄とは、思想的に響きあう点があったのであろう。「保守主義者」⁽¹⁰¹⁾柳田國男に師事する「社会主義者」山川菊栄、という一見奇妙な取り合わせは、「社会主義者」という言葉の持つイメージにとらわれずに菊栄の思想をたどってみれば、きわめて自然な帰結であったとさえ言える。

菊栄の回想によれば、柳田と菊栄が初めて顔をあわせたのは、一九四〇年九月、雑誌『新女苑』の対談の時だった⁽¹⁰²⁾（掲載は二一月号）。この「主婦の歴史」と題された対談は、柳田と菊栄の関係を考える上で興味深いものである。菊栄と柳田とは女性に関する認識において相違点多かったが、対談における柳田の「吾々の生活も亦歴史だといふことを考へて⁽¹⁰³⁾」というアドバイスを、菊栄は重く受けとめたに違いない。そして単に思想的影響を与えるに留まらず、実際に菊栄に「生活」の歴史を書かせる手配をしたのもまた、柳田である。菊栄の『武家の女性』と『わが住む村』は、柳田監修の「女性叢書」のなかに加えられることになったが、この二冊の出版許可を得ることは容易でなく（均）は既に一九三七年に執筆禁止）、柳田は何度も情報局に足を運んだようである。⁽¹⁰⁴⁾「女性叢書」には他に、柳田自身の『小さき者の声』、宮本常一『家郷の訓』『村里を行く』、瀬川清子『海女記』『販女』、江馬三枝子『飛驒の女たち』『白川村の大家族』、今和次郎『暮らしと住居』、能田多代子『村の女性』などの作品が収められているが、菊栄以外

の著者には民俗学を専門とするものが多く、その中で彼女は異色な経歴を持つ者であったと言えよう。

菊栄は、柳田との出会いの場である対談の中で、柳田の『木綿以前の事』に賛辞を寄せている。⁽¹⁰⁶⁾そして、柳田が彼女に与えた影響の大きさは、菊栄の「女性叢書」の二冊が、この『木綿以前の事』で柳田が提唱する方法に寄りそっていることから裏付けられるのである。柳田は次のように述べている。

文化批評という言葉は、響きが好いたために誰にでも共鳴せられるが、今日まで行われているものは主として演繹的のものであった。私はそれとともに他の一方から、一つ一つの問題について、今までの生活ぶりの拙劣さ、長い眼で見て賢くなかった点を、反省する機会を作らねばならぬと考える。⁽¹⁰⁶⁾

菊栄がかつて「婦人部論争」で模索していたのもまた、「演繹的のもの」を克服する「他の一方」であったのだが、そのような彼女が『木綿以前の事』に「私たちは、自分自分の疑惑から出発する研究を、すこしも手前勝手とは考えず、ておらぬのみか、むしろ手前には何の用もないことを、人だけに説いて聴かせようとする職業を軽蔑しているのではあります⁽¹⁰⁷⁾」という一文を見出したときの共鳴は、想像するに難くない。

次章に述べるように、菊栄の『武家の女性』と『わが住む村』は、柳田の言う「実地の史学」なのである。彼女の聞き書きという手法も、『木綿以前の事』で既に柳田によって「ただ勉強して本を読み、本に教えてもらおうとしても失望する。書物はたいていが男の手に成り、彼等に合点の行くことまでしか書いていないからである⁽¹⁰⁸⁾」と指摘され

たことに対応したものと見る事ができるだろう。そして菊栄は、次のような柳田の言葉を見逃さなかったに違いないのである。

政治上のいつでも大きな問題は、結局は貧乏物語に帰着する。貧の原因は複雑を極めていて、その根本の法則というものを、突き詰めたところに持って行こうとする人もすでに多い。それはかりに疑いのないことだとしても、なおそのたった一つの原因を除き去ることによって、貧を絶滅することができるとは思えないわけは、これを取り巻いて今はまだ茫漠たる未知の歴史があるからである。⁽¹⁰⁹⁾

かくして、様々な要因——思想の表現方法を極度に制限した戦時下の言論統制、農村生活の体験を経た彼女の内なる「大衆」観の変化、そして柳田國男との出会い——が相俟って、菊栄は歴史へと向かい、「社会史家」としてあらわれるのである。

終章 ひとつの帰結・『武家の女性』と『わが住む村』

周囲を巻き込み渦巻く戦争の狂気、飢えと欠乏、病弱な息子、肺炎で手遅れだと診断されながら獄中で過ごす夫の保釈を、ただ待つほかない日々——生よりも死が、しだいに近しくなっていくかと思えるときも、新しい思想は、生まれる。

一九四三年の菊栄の著作『武家の女性』と『わが住む村』は、その内容のみならず、作品の形態そのものが菊栄の思想を如実にあらわしている。そして、それは彼女の思想の一つの帰結である。

「英雄的な」人々ではなく「一口に「女子供」として問題にされなかった平凡な家庭の女たち」⁽¹⁰⁾を描いたこれらの作品を貫く最大のテーマは、広い意味での教育、あるいは伝承の問題であろう。『武家の女性』は、水戸藩の『大日本史』編纂と弘道館の教職にたずさわっていた青山家出身の実母・千世からの聞き書きを中心とする「幕末の水戸藩の下級武士の家庭と女性の日常の様子」⁽¹¹⁾の記録であり、『わが住む村』は村岡村の移り変わっていく姿を記したものであって、一読しただけでは、教育や伝承といった問題とのつながりは意識されないかもしれない。しかし、『わが住む村』における菊栄の次のような記述に目をとめるとき、菊栄の描く「生活」の歴史は、同時に教育の歴史であり、伝承の姿であることが理解されよう。

「今の娘たちは仕合せだ。もう私たちのように字のよめない者や針のもてない者は一人もいない」とお婆さんたちは羨ましがります。けれどもお婆さんたちも文字こそ仕込まれなくても、一人前の百姓として必要なことは十分仕込まれたのでした。ちょうどすべての職業が世襲であった時代には、生活、環境、教育が一つに溶け合い、子供たちは遊びの間に、ひとりでお家の芸の雰囲気呼吸し、その手ほどきをされていたように、そして今でも芸道の名門といわれる家々にはそういう伝統が残っているように、百姓の家には百姓としての教育が行われていたのです⁽¹²⁾

菊栄にとって「教育」が、制度内での与えられた知識の学習にとどまらず、「生活」全体を通じて為されるものと捉えられている以上、「教育」を描くことは「生活」を描くこととほとんど同義であるし、実際、菊栄の記述は生活全般にわたっている。しかし、菊栄のまなざしは、常に、人々がいかなる環境のもとでどのように育まれていくのかという点に注がれているのである。菊栄は、その人々を育む環境を限りなくリアルに再現しようとし、音、色、人々の表情や服装、住居の様子、そういったすべてを記そうとする。

例えば『武家の女性』の書き出しで、子供たちが学ぶ塾の朝の様子を、菊栄は次のような調子で描きはじめる。

トントン、トントンと小さな拳で表門を叩く音が次第に高く、続けざまに聞こえてきます。門番の彦八爺さんが、門脇の長屋から起き出して草履をつっかけながら出ていったのでしよう、ギーと門の扉のあく音がします。まだ前髪つきの、短い小倉袴に脇差一つ（武士の子でも十三、四までは脇差だけです）、キリッとした恰好の小さなお侍の子供たちが二人、三人、次々にわれがちにはいつて来ます。まだしらじら明けの、霧の深い夏の朝です。手習い子たちの「トン、トン」と門を叩くのを合図に、奥の方の女も子供も一せいに起き出して、雨戸をくりまです。庭の草にはまだ夜露がしっとり、時には明けきらぬ空に名残の月が仄白く残っていることさえあります。井戸にはつるべの音、勇ましい水の音。そして台所にはチョロチョロ、パチパチ、大きなかまどの下に火が燃え始めて、白い煙が連子窓から外へ流れ出します。部屋部屋には、ハタキや箒の音⁽¹³⁾

このような形で、細部までもが読者の前に浮かび上がるように表現することは、理論の代わりにリアリズムを以て社会構造の一端を描き出そうと企図する菊栄にとって、必然の要請だった。そして、菊栄は『武家の女性』を次のようにまとめている。

当時の女にとって、家庭は教室でもあり、職場でもあり、哺育所でもあり、養老院でもあり、いっさいを意味していました。女たちはそこで子供を育て、年寄をいたわり技能を習得し鍛錬もされました。維新が来て、何百年来、生活の基礎になっていた禄に離れた時、まず没落したものは、無為徒食と、浮華逸楽に陥っていた旗本と上層武士とでありましたが、世襲的な特権にたよらず、またそれにたよって生活し得るだけのものを与えられなかったために、勤労の習慣と技能の習得によって、額に汗して衣食の資を得ていた下層武士の階級は、政治に、産業に、教育に、指導的な役割を演ずることになりました。今日から見ればいうに足りない程度のものにもせよ、ともかくも女たちが家庭で得た多少の教養や技術は、この大きな変革期の荒波を漕ぎぬけて、自分を救い、家族を救う上にも役立てば、新しい時代を育てる教育者の任務を果す上にも、大きな力となったのでありました。日本の教育界に大きな貢献をした明治初期の女教員のほとんど全部が、田舎の貧乏士族の娘たちだったこと、また最初の紡績女工の仕事を進んで引き受けた義勇労働者もそれらの娘たちであったことは、よくその事実を証明しております。これは、没落した旗本の娘の中に、芸娼妓や妾奉公に出た者が多かったことと、面白い対照をしていると思います⁽¹¹⁴⁾

菊栄が描く幕末の平凡な家庭の日常における「鍛錬」は、まっすぐに新たな時代の姿につながっているのである。

菊栄は、維新後の政治を、産業を、教育を支えたのは「勤労の習慣と技能の習得によって、額に汗して衣食の資を得ていた」生活者たちであったと考えたのであり、その人々を育てあげた生活の「ありのままの姿」を記すことは、単にそれまでの歴史家が書き残した些末な細部の寄せ集めではなく、彼女にとって、まさに社会の中核のかたちを示すことを意味していたのだ。

菊栄は前の代から次の世代へ受け継がれる土台があつてこそその社会であると考えて、その伝承のありようを『武家の女性』、『わが住む村』の内容として描いた。まずはその内容に、われわれは菊栄の思想に一貫したモチーフを見出すことができる。そして、そのみならず、ともに聞き書きであるその作品の形態自体が、前の世代から菊栄への伝承の記録なのであり、ほかならぬ菊栄の思想の体現なのである。⁽¹¹⁵⁾ 作品の内容と形態とが矛盾無く調和し合うこの二重構造こそが、『武家の女性』や『わが住む村』を、それまでの菊栄のあらゆる著作から卓越せしめているのである。

体系化された理論を以て自らを「前衛」として優越させる作品形態を採りながらその著作の内容において「大衆」の味方であると説くことは、菊栄には許されがたい矛盾と映つたのではなからうか。彼女自身その愚を犯したことがないとはいえないにせよ、そうした矛盾に対するわりきれなさば、菊栄を常に悩ませたに違いない。やがて、歴史へと目を向け、人々の語ることに耳を傾け、それらを記すことによって自らの思想を表現する新たなスタイルを見つけたとき、菊栄はようやく、その矛盾から逃れ得たと感じただろう。『武家の女性』や『わが住む村』は、その菊栄の心を映すかのように明るく、なつかしい。

「私は他の来観者と一所にいたプラットフォームからとび下りて女工らの中に行きたかった。私は彼らに詫びたかった、私は彼らの前に平伏したかった、——何故なら私は、私たちは彼らを汚している、彼らを欺いている、彼らを踏み躪っているという良心の苛藉に堪えなかったから——。そして私は彼らに詫びて、私が彼らの友達であること⁽¹¹⁶⁾を告げたかった」——かつて若き菊栄を「社会主義」へと向かわせたその思いは、その当時の彼女には全く想像もつかなかったであろう形で、ここに実現されたのである。菊栄の社会史的著作を読むとき、われわれはそこに、人々へ「友達であることを告げた」菊栄の姿を見出すのだ。

(1) アリス・シュヴァルツァー『ボーヴォワールは語る 第二の性』その後（インタビュー）、福井美津子訳、平凡社ライブラリー51、一九九四年、一五七頁。

(2) 先行研究において、菊栄と均の関係については、均が菊栄に与えた影響という側面にのみ言及がなされ、菊栄が均に与えた影響についての言及は皆無に近い。本稿は、菊栄と均は互いに思想的に自律的な関係であったととらえ、菊栄についての解釈を一旦均のイメージと切り離して再検討することを主眼としているため、菊栄が均に与えた影響については検討していないが、今後の課題としたい。鶴見俊輔『山川菊栄集』第九巻解題（岩波書店、一九八二年、三六一頁～三六二頁）参照。

(3) 上野千鶴子『家父長制と資本制』、岩波書店、一九九〇年、四頁。
なお、ここで述べられているのは「伝統的な社会主義婦人解放論」一般についてであって、必ずしも上野の批判の対象は山川菊栄に特定されているわけではないが、本書一四〇頁～一四二頁の菊栄についての言及に鑑み、「伝統的な社会主義婦人解放論」には菊栄を含んでいるものとみなした。

(4) 山内みな『山内みな自伝 十二歳の紡績女工からの生涯』新宿書房、一九七五年、一〇三頁～一〇四頁参照。

(5) 外崎光広『山川菊栄論』（『季刊女子教育もんだい』一九八一年秋号、一〇八頁～一一五頁）、犬丸義一『日本におけるマ

ルクス主義婦人論の歩み」(『日本女性史』第五巻所収、東京大学出版会、一九八二年、一五二頁) 参照。

- (6) (聞き手) 菅谷直子、外崎光広、犬丸義一「山川菊栄 日本における社会主義婦人論の形成過程」、『近代日本女性史への証言』ドメス出版、一九七九年、四七頁～四八頁。

- (7) 向坂逸郎「山川均先生の生涯と思想」、『社会主義』一九五八年十月号、五頁。

- (8) 菊栄の著作を「社会史」と見なした例としては、芳賀徹『武家の女性』解説(岩波文庫、一九八三年、一九九頁～二〇〇頁)がある。

- (9) 山川菊栄『おんな二代の記』(平凡社東洋文庫、一九七二年) および、平塚らいてう「山川菊栄さん」(『平塚らいてう著作集』第四巻、大月書店、一九八三年、一四一頁～一四四頁) 参照。

- (10) 山川菊栄「二葉と妹邦子さん」、『二十世紀をあゆむ ある女の足あと』、大和書房、一九七八年、一五九頁～一六一頁。

- (11) 前掲菊栄『二十世紀をあゆむ』、一六〇頁。

- (12) 橋川文三『柳田国男』講談社学術文庫、一九七七年、二〇頁。

- (13) 山川菊栄・向坂逸郎編『山川均自伝』岩波書店、一九六一年、一三三頁～一三四頁。

- (14) 前掲『山川均自伝』、一三三頁～一六〇頁、および山川均「私の歩んだ道」、『キリスト教社会問題研究』第二号、一九五八年一二月、一頁～九頁。

- (15) 同上。

- (16) 菊栄の社会主義の「原点」は、菊栄自身によって明示されているのではないが、先行研究においては一般的に、救世軍のボランティア活動において女工たちの姿を見たことの衝撃であるとされている。鹿野政直「女性史における山川菊栄」(前掲『山川菊栄集』別巻月報、一九八二年)、および鈴木裕子『山川菊栄女性解放論集』第一巻解説(岩波書店、一九八四年)、鈴木裕子『山川菊栄評論集』解説(岩波文庫、一九九〇年) 参照。

- (17) 山川菊栄「労働階級の姉妹へ」、前掲『山川菊栄集』第一巻、二五〇頁～二五一頁。

- (18) 山川菊栄「宗教は婦人の敵」(『女性改造』一九三三年二月号)、「スピリットのゆくえ」(前掲『二十世紀をあゆむ』所収)

参照。

(19) 前掲山川均「私の歩んだ道」参照。

(20) 鹿野政直が「(菊栄の)多方面にわたる、またきわめて多産な文筆活動を追うとき、彼女の社会主義婦人論が、社会主義の婦人論への適用としてでなく、まず婦人問題への関心があってその根本的解決を資本主義社会の克服→社会主義に求めたものであったことは、明らかである」と述べるように(前掲鹿野「女性史における山川菊栄」、菊栄の初期の「娼娼論争」における発言の内容的変化を追ってみれば、菊栄が社会主義理論そのものへの関心からそれに付随するものとして女性論を展開したのではなく、女性の問題、具体的には公娼問題について解決策を探るうちに、それらのことが、(以前から彼女が興味を持っていた)社会主義と結びつくに至ったのだということがわかる。

(21) 前掲『おんな二代の記』、一七六頁―一七七頁。

(22) 小山弘健「日本マルクス主義と山川イズム」、『日本の非共産党マルクス主義者』序章、三一書房、一九六二年、九頁―一六頁。

(23) 前掲『山川均自伝』、一三三九頁。

(24) 樋口恵子「山川菊栄先生」(前掲『山川菊栄集』第五卷月報)参照。

(25) 前掲『山川均自伝』、四一七頁。

(26) 本稿は、菊栄に対する「論理的」という評価そのものに異議を唱えているのではなく、(演繹的思考方法を重視する人間)という意味での(理論家・菊栄)像に、疑義を呈さんとするものである。時事評論のひとつひとつを「論理的」に構成する人物が、必ずしも理論の体系化を志向するとは限らないのである。菊栄は確かに「論理的」であったし、そのことはまづがいなく彼女の文章を魅力的なものにしていた。堺利彦が、まだ駆け出しの菊栄を評して「智識の豊富な事、論理の厳正な事、観察の鋭いな事」(「婦人界の三思想家——与謝野晶子—平塚明子—山川菊栄——」、鈴木裕子編『堺利彦女性論集』三一書房、一九八三年、三五七頁)、「歯切れのいいキビキビした、強い、鋭い、女らしい弱々しさの少しもない、足の踏んばりの飽くまでシツカリした、あの華々しい文章」(「女といふ割増を要せぬ評論家——山川菊栄論——」、前掲『堺利彦女性

〈生活〉と〈歴史〉を結ぶもの

同志社法学 五〇巻四号

一九三(一三三五)

論集』、二二六〇頁)と絶賛したのは何ら不自然なことではないし、その菊栄の知識の豊富さ、論理の厳正さ、鋭利な観察力は、彼女の描く「歴史」にも遺憾なく発揮されているといえよう。

(27) 山川菊栄「かえらぬ夫へ」、前掲『山川菊栄集』第八巻、二七一頁。

(28) 堺利彦「山川均君についての話」、『堺利彦全集』第六巻、法律文化社、一九七〇年、三八四頁。

(29) 山川均「わが愛妻物語」、『山川均全集』第十七巻、勁草書房、一九九五年、二二三頁〜二二四頁。

(30) 新婦人協会はその結成時から各種の新聞に華々しく取り上げられている。一九二〇年三月一九日『国民新聞』、同年三月二六日および三月二八日『萬朝報』等参照。

(31) 赤瀾会は一九二一年四月二四日に結成されたが、そのことは一般の新聞には掲載されなかったと思われる。赤瀾会がマス・メディアをにぎわせたのは、それからまもない一九二二年五月一日の第二回メーデーに関してであった。「大混乱を惹起せしめ官憲を遂に逆上又逆上せしめた社会主義婦人団体赤瀾会」(当局は又相当に調査と取締の確信を持つて鋭意彼等の行動を注視して居る)、『読売新聞』一九二一年五月三日、鈴木裕子編・解説『日本女性運動資料集成』第一巻、不二出版、一九九六年、四七六頁)、「黄ろい声を張り上げて」(『大阪毎日新聞』一九二二年五月四日、前掲『日本女性運動資料集成』第一巻、四七八頁)、「警察官と衝突して乱闘を演じたる労働祭で卅二名の検束者中十一名の婦人が加はつてゐたが彼等は婦人社会主義者赤瀾会の会員で其筋から見ると黒表に上つてゐる注意人物である(中略)会員の多くは廿歳代の独身者で学生も十四五人位が社会主義者の為に就職口を得ず殆ど生活に困窮してゐるものも尠くない」(『都新聞』一九二一年五月四日、前掲『日本女性運動資料集成』第一巻、四七八頁)といった形で報道され、危険な団体として印象づけられてしまった観がある。イメージ戦略という観点からは、その出だしから失敗したといえよう。

(32) 山川菊栄「新婦人協会と赤瀾会」、初出『太陽』一九二二年七月号、前掲『山川菊栄集』第三巻、一一頁〜一八頁。

新婦人協会側と赤瀾会側との論争が雑誌『太陽』で行われた背景をめぐっては、武田清子「市川房枝の人と思想」、『市川房枝集』別巻解説、日本図書センター、一九九四年、二三三頁参照。

(33) 鈴木裕子「山川菊栄集」第三巻解説、三〇六頁。

- (34) 松尾尊允「大正期婦人の政治的自由獲得運動」、『普通選挙制度成立史の研究』別編1、岩波書店、一九八九年、三五四頁。
- (35) 山川均「普通選挙と無産階級の戦術」、『山川均全集』第四卷、勁草書房、二二二頁～二二八頁。
- (36) 同上。
- (37) 同上。
- (38) 前掲堺「山川均君についての話」。『新社会』一九一九年五月号に載った、均の著書の広告文の一部を重引。
- (39) 前掲松尾「大正期婦人の政治的自由獲得運動」参照。
- (40) 母性保護論争については、香内信子編集解説『資料 母性保護論争』（ドメス出版、一九八四年）参照。
- (41) 前掲『山内みな自伝』、八四頁～八六頁。
- (42) 奥むめお「私どもの主張と立場——山川菊栄氏の『新婦人協会と赤瀾会』を讀みて」（『日本婦人問題資料集成』第二巻政治、ドメス出版、二〇四頁～二〇七頁）を指している。
- (43) 市川房枝『市川房枝自伝 戦前編』新宿書房、一九七四年、一〇〇頁～一〇二頁。
- (44) 前掲菊栄「新婦人協会と赤瀾会」。
- (45) 平塚らいてう『平塚らいてう自伝 元始、女性は太陽であった』第三卷、大月書店、一九九二年、一九九頁。
- (46) 奥むめお『野火あかあかと 奥むめお自伝』ドメス出版、一九八八年、七一頁。
- (47) 前掲菊栄「新婦人協会と赤瀾会」。
- (48) 菊栄の参政権に関する発言を追ってみると、同じ主張をくり返すのではなく、その時々々の状況に合わせて強調点を変化させていることがわかる。

例えば、一九一九年には、「英國の婦人参政権運動」、「米國と婦人参政権」、「日本婦人と参政権」等を発表し、婦人参政権の無い日本は遅れているのだという点を強調している（山川菊栄『現代生活と婦人』（復刻版、叢書女性論15）大空社、一九九六年、五六頁～九五頁）。

菊栄は、婦人参政権は当然与えられるべきものとした上で、同時にそれが完璧な処方箋ではないことを主張し、世論や批

判相手を考慮した上で、強調する点を変化させたのである。したがって、菊栄の新婦人協会批判についても、こうしたコンテクストに位置づけて検討しなければ、正しく評価することはできない。

(49) 山川菊栄「明治文化と婦人」、初出『解放』一九二二年一〇月号、前掲『山川菊栄集』第三卷、二九頁〜四〇頁。

(50) 同上。

(51) 前掲註33。

(52) 前掲註34。

(53) 山川菊栄『婦人の勝利』日本評論社、一九一九年、二〇〇頁。

(54) 前掲菊栄「新婦人協会と赤瀾会」。

(55) 山川菊栄「ブルジョアの「新しき女」より無産階級の「新婦人」へ」、前掲『山川菊栄集』第三卷、一九頁。

(56) 菊栄は「ブルジョア女性解放運動」の意義を認めなかったのではなく、むしろ『青鞜』派が世論に与えた影響の大きさを重視し、平塚らいてうのキャッチフレーズづくりの巧みさを高く評価したからこそ、「過去の十年は、ブルジョアの「新しき女」のタイプを發達し普及せしめた時代であった。今やブルジョアの婦人界は「新しき女」の天下である。無産階級の「新婦人」は、ブルジョアのそれのごとく、個人的、享樂的なることを特徴とせず(以下略)」(前掲『山川菊栄集』第三卷、二五頁)と述べて、批判され飽きられつつある「新しき女」に代わって、「新婦人」という新たなキャッチフレーズを提唱し、運動のイメージを刷新しようと試みたのではないか。

(57) 前掲奥「私どもの主張と立場」。

(58) 山川均「無産階級運動の方向転換」、初出『前衛』一九二二年七・八月合併号、前掲『山川均全集』第四卷、三三六頁〜三四五頁。

(59) 高島通敏『山川均集』解説、筑摩書房、一九七六年、四九一頁。

(60) 均は「方向転換論は第一には私自身の自己批判と清算であり、私自身の方向転換の踏み切りをつけるということであり、同時に過去の社会主義運動の清算だったのです」と述べている(前掲『山川均自伝』、四一四頁)。

(61) 〈菊栄の方向転換〉という解釈・批判の根拠として用いられているのは、菊栄の「無産婦人運動の任務とその批判」(『山川菊栄集』第五卷所収)である。その菊栄批判の一例としては、田島ひで『ひとすじの道』(ぼるぶ自伝選集、一九八〇年、一〇六頁―一〇七頁)参照。前掲松尾「大正期婦人の政治的自由獲得運動」(三七五頁―三七六頁)も併せて参照されたい。「婦人部論争」の中で、菊栄は、「ブルジョア」に妥協しているかのように非難されていたのだった(「大衆の中への溺死」)。そして菊栄の評論「無産婦人運動の任務とその批判」は、その「婦人部論争」の延長線上にある。菊栄の表現(「われわれは最初から小ブルジョア婦人運動といかなる場合にも絶対的に敵対してきた」)は、そうしたコンテクストのもとにおかれるべきであり、単純に過去を振り返ったものとは区別して扱われなければならない。

(62) 幸徳・田添論争については、幸徳秋水「余が思想の変化」、堺利彦「社会党運動の方針」、田添鉄二「議会政策論」、田添鉄二氏の演説要領、「幸徳秋水氏の演説」、山川均「社会党大会の成績」(以上、すべて林茂、西田長寿編『平民新聞論説集』所収、岩波文庫、一九六一年)、および前掲小山『日本の非共産党マルクス主義者』の三二六頁―四六頁を参照。

(63) 前掲『山川均自伝』、四一四頁。

(64) 菊栄「ブルジョア婦人運動の動揺」(前掲『山川菊栄集』第三卷)参照。この評論が書かれた背景には、新婦人協会が自らの主張する治安警察法第五条改正が現実となって「勝利」に沸き立ち、協会から労働者女性の言論を「排斥」しようとし、その動きをマス・メディアが大きく取り上げた、ということがある。

(65) 藤田省三「昭和八年」を中心とする転向の状況、「転向の思想史的研究」第一章、みすず書房、一九九七年、一頁―六九頁。

(66) 前掲菊栄『婦人の勝利』、二二〇二頁―二二〇三頁。

(67) 藤田省三、前掲書、一一頁。

(68) 鹿野政直が「山川菊栄の論壇への登場は、それまでの『女流』にありがちの、「われ」がなまのままで露出するのとは異なるタイプの思想家の出現を意味した」と述べるように(鹿野政直『わが住む村』解説、岩波文庫、一九八三年、二一〇頁)、菊栄は、過剰な「われ」の強調を嫌悪した。菊栄の初期の評論「俺が」「俺の」「俺に」「俺を」(初出一九一六年、

〈生活〉と〈歴史〉を結ぶもの

前掲『山川菊栄集』第一巻所収) 参照。

(69) 山川菊栄「大試練を経た婦人の使命」、前掲『山川菊栄集』第三巻、二三四頁。

(70) 前掲『山川菊栄集』第三巻、二四九頁。

(71) 同上。

(72) 前掲『山川菊栄集』第三巻、二五〇頁～二五一頁。

(73) 山川菊栄「人種的偏見・性的偏見・階級的偏見」、初出『雄弁』一九二四年六月号、前掲『山川菊栄集』第三巻、二六五頁。

(74) 前掲『山川菊栄集』第三巻、二五二頁～二五三頁。

(75) 姜徳相「社会主義者の問題」、『関東大震災』第九章、中公新書、一九七五年。

(76) 均は、震災前の一九二三年四月には「朝鮮の無産階級は、日本の無産階級の僚友」と述べている(山川均「無産階級から見た朝鮮解放問題」、前掲『山川均全集』第五巻、一六三頁～一六四頁)。しかし、震災後に均が発表した震災関連の論文「復興問題と社会主義的政策」(前掲『山川均全集』第五巻、二六四頁～二七五頁)、および「地震は社会主義を揺り潰したか」(前掲『山川均全集』第五巻、三一五頁～三一八頁)に朝鮮人虐殺事件についての言及は見られない。

(77) 本稿第一章第二節④は、前掲『日本女性運動資料集成』第四巻、第一五編第一章「労働組合婦人部・婦人同盟論争」に収録された資料を中心とする検討である。

(78) 日本で最初の労働組合婦人部として誕生した友愛会婦人部の設置(一九一六年六月)の経緯については、鈴木裕子「友愛会婦人部の歴史」(『女性と労働組合(上)』第一章、れんが書房新社、一九九〇年) 参照。

(79) 福永操「あるおんな共産主義者の回想」れんが書房新社、一九八二年、一四六頁。

(80) 山川菊栄「無産階級運動における婦人の問題」、前掲『山川菊栄集』第四巻、一二六頁。

(81) 山川菊栄「婦人と政治」、前掲『山川菊栄集』第四巻、一八九頁。

(82) 前掲菊栄「明治文化と婦人」(『山川菊栄集』第三巻、三五頁)。

- (83) 「組織部」や「教育部」によって問題解決を図るべきだとしたのは、杉浦啓一「誌上討論 組合婦人部は必要か？否！」(初出『無産者新聞』一九二六年四月一七日、前掲『日本女性運動資料集成』第四卷、三七五頁―三七六頁)。
- (84) 「婦人労働組合」を以て「婦人部」の代わりとする案は、吉村生「婦人部」と言ふ独立部門の必要如何——私は必要なしと思ふ」(初出『労働新聞』第一九号、一九二六年三月二〇日、前掲『日本女性運動資料集成』第四卷、三七三頁)。
- (85) 菊栄が「婦人同盟」結成に反対したこと理由をめぐり、先行研究における見解の主なもの、(菊栄が「婦人同盟」に反対したのは、菊栄が結局のところ「女性問題」より「階級闘争」の方を重視していたから)というものである。例えば、福永前掲『あるおんな共産主義者の回想』、鈴木裕子「山川菊栄と女性解放思想」(『流動』一九七六年五月号)、田中寿美子『山川菊栄集』第四卷解題等がそれである。しかし、「関東婦人同盟」がその幹部によって解散させられた際に菊栄が寄せたコメント(山川菊栄「関東婦人同盟の解散について」、『無産者運動と婦人の問題』白揚社、一九二八年、二九二頁―二九六頁)に明らかのように、菊栄は、すでにできた「婦人同盟」については、各団体の合同によって組織を大きくするように薦め、その解体には反対しているのである。コミンテルンが性別団体に反対していることを知っている、と明言した上で、「それにもかかはらず」婦人同盟を解体すべきでないと菊栄が述べている点を考慮せねばならない。
- (86) 菊栄の「婦人部テーゼ」を貫く思考方法が帰納法的であることは、平田和子「婦人部論争 その歴史と意義」(『歴史評論』一九六六年一月号)で既に指摘されている。
- (87) 日本労働組合評議会中央常任委員会「婦人運動に関する意見書 討議資料」一九二六年二月三〇日、前掲『日本女性運動資料集成』第四卷、四一六頁。
- (88) 前掲「婦人運動に関する意見書——討議資料」、『日本女性運動資料集成』第四卷、四二二頁。
- (89) 同上。
- (90) 同上。
- (91) 山川菊栄「フェミニズムの検討」、初出『女人芸術』一九二八年七月創刊号(巻頭論文)、前掲『山川菊栄集』第五卷、七一頁。

(92) 菊栄は「ジェンダー」という語こそ直接には用いなかったが、菊栄の説くところは、「性」は単に絶対不変の「生理的」な側面だけを持つのではなく、「社会的」な要因とともに移り変わるものでもあるということ、すなわち「ジェンダー」としての性だった。「ジェンダー」概念については J. W. Scott “Gender and the Politics of History” (Columbia University Press, 1988 荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』平凡社、一九九二年) 参照。

(93) 竹内好「日本共産党批判 一」、『新編 日本イデオロギイ』筑摩書房、一九六六年、一七六頁～一七七頁。

(94) 前掲菊栄『婦人の勝利』、二〇〇頁。

(95) 山川菊栄「婦人運動小史」、前掲『山川菊栄集』第五巻、六五頁。

(96) 菊栄の代表的著作である『婦人の勝利』(一九一九年) および『婦人問題と婦人運動』(一九二五年) は、原始社会や未開部族における母系制の問題に関して、大部を割いて言及しており、菊栄が母系制の問題との関連で原始時代に強く関心を引かれていたことがわかる。

(97) 前掲菊栄『おんな二代の記』、二九七頁～二九八頁。

(98) 山川菊栄『わが住む村』、岩波文庫、一九八三年、七頁。

(99) 山川菊栄『女は働いてゐる』(初版は一九四〇年、復刻版、近代女性文献資料叢書40) 大空社、一九九四年、六〇頁～六一頁。

(100) 柳田國男・山川菊栄対談「主婦の歴史」、『新女苑』一九四〇年十一月号、二〇二頁。

(101) 橋川文三「保守主義と転向——柳田國男・白鳥義千代」、『共同研究 転向』下巻、平凡社、一九六二年、二三三頁～二四五頁参照。

(102) 前掲菊栄「柳田先生の思い出」。

(103) 前掲『新女苑』対談、一九八頁。

(104) 前掲菊栄「柳田先生の思い出」。

(105) 前掲『新女苑』対談、一九〇頁。

- (106) 柳田國男「木綿以前の事」、『柳田國男全集』17、ちくま文庫、二六九頁。
- (107) 同、一一頁。
- (108) 同、二五六頁。
- (109) 同、二六六頁。
- (110) 前掲菊栄『武家の女性』、一八五頁。
- (111) 前掲菊栄『武家の女性』、七頁。
- (112) 前掲菊栄『わが住む村』、一四三頁―一四四頁。
- (113) 前掲菊栄『武家の女性』、一一頁。
- (114) 前掲菊栄『武家の女性』、一八三頁―一八四頁。
- (115) 菊栄が「伝承」をいかに重視していたかは、菊栄が自らの自伝を『おんな二代の記』、すなわち、母の人生の記録と自分の自伝とを兼ねた形で出版したことからもわかる。
- (116) 前掲註17（第一章第一節）。